
砲台守の太一郎

青池 間広

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砲台守の太一郎

【Nコード】

N6260T

【作者名】

青池 間広

【あらすじ】

――世の中は、ただ流れてゆく。

太平洋戦争末期の、昭和二〇年五月。神戸の小さな町で、父親のいない太一郎少年は母と姉の三人で暮らしていた。彼は、“愛国少年の代表”として周りの期待に応えながら、今日もまた、いつものように煩わしい日常を送っていた。

山の奥にある、“砲台”に出会うまでは……。

第一回 あるところの少国民

世の中はただ流れてゆく

その中で人は、ただ流されてゆく。

意思や言葉もまた、浮いては消える泡沫に過ぎない。

一 少年のこと

確かに神長^{たいちろう}太一郎という少年は、同年代の中では一見ひ弱な印象が強いので、周りが愛国少年と褒め称えているのに対して、その実物との落差は大きいだろう。手足も牛蒡のように細く小柄な少年を、大柄で丸坊主の典型的な餓鬼大将と同一に見せているのは、かつて特高（特別高等警察）に勤務していた父親の存在に他ならない。

そして、昭和一八年に父親の神長総爾が結核で死去した後も、太一郎は依然として町の愛国少年の代表として通っていた。

だからと言って、彼自身はいつまでも父の威を借りたいとは思っていない。それは母親の妙子や、姉の巴も同じであった。

「お父さんの目は鶏や鷹の目でもなかったのに、近所の人達にはそう見えたんやね……」太一郎らに、母は時々そう言っては静かに微笑んでいる。

「お母さんにはね、そうは見えへんかったよ」

口数の少ない人だから気難しく思われていたかもしれない。けれど、あの人は誰に対しても優しくかった。そう話す度に見せる母の横顔が、少年は好きだった。

太一郎は、二・二六事件が起こる前年の昭和十年、神戸市の東灘区に位置する張^{はりも}茂という小さな町に生まれた。そして、彼が生まれるちょうど五年前にあたる昭和五年には、姉の巴が生まれた。前年の大恐慌が世界に飛び火し、日本でも昭和恐慌が起こった年である。

それから遡って、彼らの両親、神長家の縁者による推薦により警察庁に入った亡父の総爾と妙子が見合いを契機に夫婦となったのが、ちょうど昭和三年の夏頃である。

翻って時は進み、総爾が職場で突然血を吐いて倒れ、一ヶ月経たないうちに家族の看病の甲斐もなく逝去したのが昭和一八年になる。ともあれ――今日もまた、神長太郎はいつも通り憂鬱な朝を迎えた。季節柄、学校からの言われた日課の乾布摩擦をした後、ほとんど具の入っていない雑炊を食べて、歯磨きと共に一か月に一度服用を義務付けられている、臭くて苦いだけのギョウ虫駆除薬を我慢して飲み干しては、ますます胃から込み上げる気分の悪さと格闘する。

昨日今日明日、そしてこれからも変わらない、朝から晩まで日課に溢れた一日を重ねていく。父の記憶も徐々に色褪せていくのを感じ、それすらも無自覚に薄れるのを知らないままに。十歳の太一郎は、自分の日常がそうと信じて疑わなかった。

春も盛りが過ぎ、立夏だというのに、まだ先の入梅を告げるような灰色の朧雲が空を覆っていた。

昭和二〇年、五月に入って間もない頃である。大東亜戦争が始まり、約三年と五か月近くが経とうとしていた。

二 いつもの光景

一日の中では長くない。しかし、この一時ほどの憂鬱はない。

何か悪い事をしたわけでも特に理由があるわけでもないのに、憚るような素振りで周囲を窺いながら玄関戸をゆっくり開けると、急に自分の卑屈さに馬鹿らしさを覚えつつ、神長太郎は庭を通り過ぎた。

狭い庭には、近年から深刻な食糧不足に備え、せっせと家族で作った南瓜畑があり、黄色い雄花が目立ち始めている。おそらく、今夏には実るはずである。

門からヒョイと顔を出すと、お馴染みの歓声が大きく響いた。

『防水用水』と書かれた四角い防水用水槽の前にはポンプや桶が綺麗に置かれ、その傍にいた児童達が彼の姿を捉えて走り寄る。

小さな緊張を抑えるためか、手を胸の上に置く。彼にはいつもの事である。

さきほど胃の中に入れたばかりの雑炊が徐々に湧き上がる悪感に襲われるのがいつも通りなら、彼が口元をキュッと締めて必死に我慢しつつ、まるで似合わない（それでもやや引きつっている）笑顔で出迎えるのも、やはりいつもの習慣だ。

親の職業は、そのまま子の地位になる。

良くも悪しくも、彼が上位に目されているのは、特高に勤めていた父の総爾のおかげである。太一郎は普通でありたかった。皆の先頭に立つのを煩わしいと思っている。そもそも自分には人前に立つのは合わない気がするし、事実彼はそれほど豪胆な性格ではない。どちらかと言えば、群れの後ろに控える、頭数の要員でいたいのが本音だった。

だが、今のところ彼と同じく官憲に勤めている父親はいない。当分は、太一郎が首領格から降ろされる兆しもないだろう。

確かに、大工の棟梁、魚屋、八百屋、豆腐売り、蠟燭売り、その他諸々……そして特高なのだから、到底釣り合うはずもない。

しかし、特高の倅が何故自分なのか。太一郎には最大の謎であった。

「神長様のおいでや！」

素っ頓狂な奇声を上げるのは、同じ班の荒岩毅だった。毬栗の頭に愛嬌な顔をしているが、最初に太一郎の父親の職業を知るや否や教室中に吹聴し、彼を始めに“崇拜”し出した、どこの学校や教室にもいる典型的な伝書鳩だ。

毅に遅れて、班に属する児童達が一気に駆け寄る。皆は生まれた時からこの町に住んでいるので、知らない者はいない。しかし、彼自身の内気な性格が祟ったせいか互いに近過ぎるせいか、心から話

せる相手も逆にいないのが実情だった。

「太ちゃん！　またアカを捕まっとうか？」

わざわざ耳元に向かってキィキィ声を放つ毅は、いつも決まってそう叫ぶ。頬に唾がかかるのにもすっかり慣れた。

なぜ、自分はそんな芸当ができるのであろうか。かつて父のしていた部署の仕事を、太一郎なりに何度も丁寧に説明を繰り返しても同じ質問をする小うるさい声は毎朝止む事を知らない。今日のような曇りが続くと余計に気落ちしてしまう。

噂というものは、（たとえ大昔であっても）事実とかけ離れて嘘っぽくて大袈裟になっていくのは常である。そこに内容は関係ない。父は確かに特高に勤めてはいた。それは事実だし、太一郎は断じて否定するつもりはない。

だが、毅やその取り巻き達が期待するような、捜査一課や二課のような花形の最前線にいたわけではない。治安維持法が改正された年に入庁してから病気で倒れてしまうまで、検閲課という配属で一筋働いてきた。

父が勤めている特高が具体的にどんな事をしているのか知らないわけではなかった。泣く子も黙る特高は、子供の間でも厳しい尋問と拷問で有名だった。あか、アカ、赤。以前、彼らの会う度に聞かれるのは、そう呼ばれる恐ろしい連中が、どんな悪さをして逮捕され、そしてどのような尋問を受けたのか。

太一郎でも知りたい、好奇心旺盛な話ばかりである。しかし、父の総爾はあまり仕事の話を家族にする事はなかった。

毅達は、今でも神長家が特高と繋がりががあるように誤解されているようだが、父の葬儀には同じ部署に勤めていた数人しか来なかった。それからしばらくして、検閲課というのが事務職で、日蔭に属するところなのを知った。

押収された書物、出版物、映画、新聞記事などの中から、危険思想とされる共産主義の疑いのある個所を検めて、『修正』もしくは『不許可』の判をバンバン押していく。そんな退屈で地味な仕事を、

父が延々とこなしていたのだろうか。

「捕まっとうよ。この間は、十人くらいいっぺんやそうや」

太一郎が適当にそう言い繕うと、彼らは栓を切ったように歓声を上げる。アカは死刑や。恥知らずの非国民や。

やはり、これもまたいつもの朝の風景だった。しかし、ウンザリするほどの慣習であっても、馴れ合うのを忘れないように心得ていた。

太一郎は投げやりには自慢げに嘘話を披露してみせる。

実は、太一郎は国民学校に入学当初、毅にイジメられていた時期があった。だが、彼の父親が特高の人間だと知るや否や、態度を一変させて金魚の糞になり変わった。彼はそんな状態を保つ方法は、父の影に入るしかないと思いついた。

結局、今日まで父の死後以降も嘘の武勇伝を伝播した。

できる事なら、一人で通学したかったが、班ごとの通学が固く決められているためそうもいかない。ましてや、彼は“愛国少年の代表”とされている。自分から率先して、『軍艦マーチ』を歌う義務があるのだ（何の因果か、彼の班では四年生が最年長だった）。目には見えない役割を課され、太一郎少年はがんじがらめに縛られていた。

自分一人で生きているのなら、止めるのも容易いだろうが。

「お、知恵遅れの春乃がおるぞ」

彼らの級友である林田恭平——鼠のような出っ歯が目立つ——が目敏く指摘した相手は、神長家の向かいに建つ月影酒屋の店先にいた。生欠仲を出して箸をちんたらと掃く、小柄な少女が月影家の一人娘の春乃であった。

それもまた、いつもと変わらない風景。

彼らの声に気づき、石のように硬直したまま動けないでいる彼女を“かごめ、かごめ”のように取り囲む。蒼白な顔に向かって、一斉に囃し立てた。

「おい、春乃！　これ、いくつや？」

三本指に無言で首を振る少女を毅は嗤う。そして、「籠の中の馬鹿は、いついつ出やる、夜明けの晩に」と皆が大声で歌ってからかう。

「堪忍して……堪忍して……」

中心にいる彼女は耳を塞いで懸命に助けを請うが、誰も歌を止めようとはせず、むしろ声を上げる。通り過ぎる他の班の子供もその光景を見てニタニタ嗤う。

仕方なく参加せざるを得ない太一郎は、少女の顔を見た。悪童達に怯える大きな目は、どこか『のらくろ』を彷彿とさせる。母親も放任しているのか、おかつぱの髪はどちらかと言えばザンバラに近い状態で汚らしい。

もちろん、目の前の幼馴染の女の子は、のらくろと違い、軍曹でもなければ少尉でもなかった。女は兵士にはなれない。看護婦や工員などの挺身隊になるのが義務である。

しかし、春乃は知恵遅れであった。太一郎は毅から、それを聞いた。

彼女の両親は、揃って短気で気性が荒い。まるで癪癪を起こした暴れん坊のように、毎日、人前で春乃を殴っては叱ってばかりしていた。まもなく、周りも同じく少女が普通ではないと思ひ込んで慣れてしまった。

太一郎は、ずっと不思議と思っていた。毅にしても他の連中にしても、そして自分にしても、昔は同じ友達として一緒に遊んでいたはずだった。昔は勝気で足の速い春乃を、五歳の時まで男だと勘違いしていたほどだった。

確かに、他の皆よりも言葉が少し舌足らで、こちらが首を捻る言動もあった。だが、それらを除けば、自分達とあまり変わらなかった。

なのに、春乃が知恵遅れだと知った途端、昔の友情を忘れたように、こんな仕打ちをしているのだ。それを分かっているはずなのに、自分もその仲間に入っていると気づく度に、先の思考は途切れてし

まう。

違う。太一郎には分かっていた。言葉や形にできなくとも、決して正しくなく、ただの卑怯以外の何者でもない。

しかし、毅達を咎めて得られるものなどないのは、火を見るより明らかだ。そう、自分もまた同類に過ぎない。皆で寄って集って頭の悪い幼馴染を囲んでからかうのは、何も今日が初めてではない。そうでなければ、今この時に他の者を咎めるべきなのだ。班の頭領ならば、それを言った所で何も怖くないはずだ。

しかし、自分にはそれをする勇氣はないのを知っていた。それが余計にみじめであった。自分を思いつきり罵ってやりたい瞬間であった。

恥にも色々ある。晒す恥もあれば、何もしないという恥もあり。いつ、どこで聞いたか覚えのない母の言葉が脳裏をよぎり、太一郎は一層、みじめで卑屈な気持ちになる。

たまらなくなって、彼は助け舟を出す代わりに時期を見計うと、「こんな馬鹿相手にしつとと、学校に遅れよーで」となんとなしに呆れたように装いながら言い繕い、無言で足早に歩き出した。他の者が慌ててついて行く。

家屋の多い通りを過ぎるまで、太一郎はずっと目を伏せていた。いつの頃か、春乃が自分だけをじつと直視しているのに気づいたからだ。非難でも軽蔑でもない、言葉では説明できない瞳に射られていると、どうしようもなく体中が熱くなってくる。

露天商が並ぶあかつき商店街の大道を足早に進んだ。どこもかしこも、開いているのか閉まっているのか分からないぐらい品数が乏しい。

ふと、後ろを振り向いた。一瞬ではあるが、はるか後方にある家の通りに立つ少女が見えた。さすがに顔までは分からない。

見るなよ。自分に対して言ったのか、彼女に向けて言ったのか。しかし、そう言う資格は少なくとも自分にはない。それに気づいてから、臆病者のように（事実そうだと分かっている）、その場から

逃げたいと思った。この時はいつもじめに気持ちにさせられる。

太一郎は衝動的に下唇を軽く噛んでいた。

自分は臆病者じゃない。卑怯者じゃない。頭の中でそればかりを反芻した。

早くも、背中には汗が流れ始めていた。

三 朝礼集会

太一郎達が通う張茂第五国民学校は、直線の商店街から抜けた先にあり、中心にポツンと田畑に囲まれるようにして建っていた。以前は雑木林が広がっていたのだが、食糧事情の折、周りが開墾されて学校だけが残る結果となった。

勉強して偉くなるための学校と、兵隊さん達の食料を耕す畑に田んぼ。太一郎を始め、一年生たちでさえ、それらがいかに重要であるか心得ていた。

この時期らしく、田んぼではちょうど田植えが始まっていた。規則正しく並ぶ幼苗から、黄金色の稲穂を経て、井に盛られた白米を連想したのだろう。登校する児童達の中には、物欲しそうな目でその場に立ち止まり腹の音を鳴らす者もいた。

太一郎組が誘惑に屈したのは、遠い昔である。今では、下級生に「あれは全部、御国のために戦っている兵隊さんの物だ」と教え諭すまでになっていた。

八時十分、幅の狭い小道を通じて校門の前まで来た彼らは、その脇にある建造物に前で止まり、機械のような直線的な動きでそこに体を向けた。

西洋式の城壁を模した外観に、大きな扉が付いた奉安殿——その中には、天皇陛下の御真影と教育勅語の文言が収められているらしい——に向かい深くお辞儀する。

さらに、竹刀を持って睨みを利かす体育教師に戦々恐々しながら、正面玄関の近くの二宮金次郎像にも同じように姿勢を正して礼を繰

り返した。

これらの行為を怠ると、見張りの教師の鉄拳が飛んでくるのを、児童達は身に染みるほど知っている。

誰にだって経験があるので、その光景を前に笑える者などいないはずである。一年生の頃、太一郎は当たり前のように通り過ぎてしまい、一度だけ教師の折檻による制裁を浴びた事があった。父以外の大人に頬を殴られ、その際に歯が一本抜けた。

今でも校門で礼をする度に、その箇所が生えた歯があるのを確かめるように条件反射で舐めてしまう。他の者もそうだと、彼は信じて疑わなかった。

“習慣”は必ず体で覚える。頭で学ぶ前には、嫌でも会得していた。

いつものように、校庭と南瓜と芋が植えられた裏庭を抜けて、下足場から木造の廊下を歩いて教室に入る。

太一郎の教室は毅も同じで四年二組である。

二人一組になった持ち上げ式の机が並ぶ教室は、どこの組にもある大東亜地図——本国を始め、満州、その下の島々には領土を示す国旗が塗られている——と校訓が収められた額が掛っているのみであった。

ランドセルと置くと児童達は席に着く間もなく、教室を出て再び外へと向かい始める。毎朝の日課である全校集会が控えているのだ。太一郎は、実はこの時間が一番苦手としていた。何も嫌いというわけではない。遥か東京にある皇居に向かつての宮城遙礼は、少国民としての当然の義務であると思っているし、国旗掲揚と共に、国歌を一斉に唱歌し、校長先生の（これがまた長いのだが）訓話を、醒めたばかりの脳に眠気を催すのにも耐える。

そこまでは大丈夫なのだが、その先に待っているラジオ体操が難儀なのだ。

全校生徒によるラジオ体操は、夏休みの時にあるのとは違う。校舎から顔を覗かせ監視をする強面の教師の存在に怯えなければなら

ない。もしも少しでも間違えようものなら、居残りが待っているで、緊張感が続いて気を緩める暇がないのだ。

彼もまた、全員が広がっていく中で体をこわばらせ、既に覚えた順番を頭の中で再生させる。後は四肢が勝手に動いてくれるのだが、間違えるかもしれないという不安だけは依然として存在している。

まだ季節は涼しいはずなのに、顔中に汗が濡れていた。

運動会の集団の演技のように、一糸乱れる事なくしなければならなく、新入りの一年生だけでなく、太一郎の先輩の中にもうっかり間違える者もいるのだから容易ではない。体操の内容自体はそんなに難しくはないはずなのに不思議であった。

曲に合わせて体を動かす太一郎は時たま疑問に思っている。少国民たる自分はいつでも正しいとありたいと思っている。規律をすべて守り、模範になる事で、戦地に今も戦っている兵隊さんに負けないうように――そのように作文でも強く主張しているし、心の中でも嘘は微塵もないと確信していた。嘘が分かる機械があるならば、真っ先に自分がやっても一向に構わないと彼は思っている。

それなのに、なぜこんなに怯えなくていけないのか。全員が規律正しく振る舞えるとは限らない。だから訓導のために怖い存在が必要なのだろう。

しかし、彼らは怖がっているのであれば、自分も同類なのではないか。自分は皆が憧れる愛国少年のつもりなのに。

自分は勿論、周りで間違える生徒は、今日はいなかった。それらをやっと終わり、教室に帰る途中、自分より上級生の誰かが、教師に殴られているのが目に入った。体操を間違えたらしい。後ろから、毅達の笑いの入った囁きが聞こえる。

太一郎は特に感慨を抱かないようにして通り過ぎた。明日は我が身。そう思いながら気を付けていかなければならない。

教室に戻る間、怯えていた上級生の顔が、先刻イジメていた幼馴染のそれと重なり、一層憂鬱な気分になり落ち込んだ。

四 将来の夢は……

全校集会が難なく終わった後、十五分の朝の掃除時間を経て、やっと一時間目が始まると、いきなり修身の授業が来るというのは、たまらない追い打ちである。

外にいた時の緊張感が抜けきらないうちに、担任の玉田先生——金縁の眼鏡をかけて、よれよれの国民服を着ている——が教室に入ってきて、トカゲのような目をぎょろりと尖らして教室の中の生徒達を睥睨する。

爬虫類を想起させるその目が、太一郎は生理的に好きになれなかった。

誰かの掛け声で全員が背筋を伸ばし、一糸乱れる事なく起立、礼、そして着席する。

「さて、皆さん。今、戦地ではたくさんの方々が戦い、その中で命を散らしている人も大勢おります」

玉田先生は大きく咳払いをし、「君達もいつか兵隊さんになります。この教室の中に、それ以外の道を歩む者は一人もいないと、僕は信じてます」

元は関東の生まれである玉田先生の言葉は訛りに少し癖がある。その風貌も手伝い、下手をすると笑ってしまいそうになるのはいつもの事だ。

でも、先生は兵隊さんじゃないよね。太一郎は心の中で発した皮肉に失笑を耐えつつ、自分でも無表情のお面を演じていると自覚して先生の話を聞いていた。

玉田先生は授業を始める前にいつも訓話をするのだが、細い小枝のような体格で話すので、いまいち迫力がこちらに伝わらない。

「神長君」

自分が指された、と心臓が飛び出しそうぐらい太一郎は驚いた。しかし、その直後には長い習慣で覚えた体が反射的に動いていた。

弾丸のように素早く起立して、「はい！」

「君は将来何になりたいですか？」

僕は役者になります。以前、そう言った生徒がいたというのを風の噂で聞いた。あくまでも、その場にいたわけでもない。しかし、そいつが担任に鼓膜が破れるまで殴られたという話を、太一郎は嘘とは到底思えなかった。

たといえ、別の夢が持ったとしても、彼には言えないだろうし、他の者もそうだろう。

「はい、先生！」一気に深呼吸をして一気に言葉を続ける。「僕は、将来一兵士として大日本帝国の礎の一つとなるために生れてきました。そして、我が国すべての父であらせられる、偉大なる天皇陛下のために心身ともに命を、七生まで捧げる所存であります。それが僕の夢です」

ハキハキと、ゆっくりと聞き取りやすく。太一郎はいつも意識していた。失敗など許されないと強く思っていた。

教室の中が静まり、太一郎自身も息が詰まりそうな気分になった。ここで目を逸らしてはいけない。先生の顔に何かかがついているのを見つけるように注視する。玉田教諭の方も同様に睨むので、我慢が一番必要な瞬間だった。

不意に、玉田教諭が拍手を上げた。するとせきを切ったように、級友達も弾けるぐらいの称賛を太一郎に贈った。

彼は安堵の息を小さく漏らしながら、心の中では諸手を力一杯に挙げた。

「さすが、亡き父に恥じない素晴らしい決意です。さぞかし、お父様も草葉の陰で喜んでいる事でしょう」

着席してください。高い声でそう命じられたので、ホッとした気持ちで座った。その後彼の後ろや隣の生徒も指摘されたが、自分ほどの称賛を浴びた者はいない。

彼の成績は、この教室や、もしかしたら学年では上位に位置していた。いわゆる優等生であるが、太一郎にはその自覚はないかもしれない。

幼い頃から、町内で愛国少年の代表と持ち上げられてきた抑圧が、そうさせたのかは定かではない。太一郎は、誰が見ても努力家と賞賛されるぐらい、人一倍、勉学に励んできたのは事実だった。

特に父の急死が急かせるように、体育は平均よりやや低いものの、それ以外の教科では総合的に【優】を取っている。

愛国少年の急先鋒と祭り上げられるのは、生来どちらかと言えば内気だった太一郎には少し荷の重い称号で、出来る事ならば誰かに譲りたいも思っていた。

だがその反面、少国民の模範とされている自分を誇りにしている。それが亡き父に報いるとさえ思っていた。

【修身】の時間は、太一郎が懂れている乃木將軍の少年時代を題して進行していく。氏も自分と同じように、体はあまり丈夫ではなかったのに、日露戦争では英雄になった。

体の大小が問題ではない。要は、頭と気概だと太一郎は自信を持っていた。

とある愛国少年の一日は、いつものように瞬く間に過ぎていった。

五 空き地の戦争ゴツコ

もう、それは面白いもつまらないもない。

放課後、家に走るように帰ると荷物だけを部屋に置き、畳で足が滑って強かに尻餅をつきながらも折り返すように家を出た。向かう先はいつも決まっている。

飛び出していった少年を、箒を持つ春乃が片手を弱く振って見送ったが、彼自身はそれに気がついていない。

太一郎にとって、小さい頃からやっている習慣は楽しいと言えばそうなのだが、自分から積極的に好む遊びであるかと微妙である。しかし、大人にとって付き合いが重要なものであるように、子供の世界もまた、ある意味ではそれ以上に重んじられる決まりである。一人だけが嫌だと感じて、絶対に自由には拔けられないのが常だ。

もつとも、そんなものは一人もない。

空き地は家の近くに流れる河原を渡った向こう側にある。そこには中心に土管が一つだけあり、その端には盛り上がった凹凸がいくつもあり、その上にホロが掛けられている。先月設置されたばかりの新しい防空壕である。

空き地には、すでに集まった毅や恭平、他の面々が、赤軍と白軍と分かれて戦争ゴッコに興じていた。恭平が彼に気づくと、わざわざ手を上げて遊びを中断させた。

「太ちゃん、遅いな」

違う。君達が早過ぎるんだよ。そう思っても本音は口に出さず、太一郎は坊主頭を掻きながら、「ごめん、ごめん」と愛想笑いで場を濁した。

太一郎が、友人よりも遅いのは足のためだけではない。級長である彼は、毎日の放課後、教室の黒板を丹念に拭いたり、勉強の予習をしていたりしていたのである。もちろん、自分から進んでやっている。

それで毅や恭平らと遊ぶ時間を削がれるのだが、最近になってそれでもいいように思えるようになっていた。一人で淡々と作業をするのが性に合っているのだ。

太一郎が、土管の中に納めてある軍刀を見立てた竹光や銃剣の作り物を装備して、数の少ない白軍の陣営に入ると（入営し）、すぐに戦争が再開された。

太一郎と恭平が属する赤軍は皇軍を意味していた。毅のいる白軍とは敵国（さっさと“白旗”を上げるべき米帝や英帝）である。

「突撃！」似合わない声を上げて、太一郎が先陣を切った。どこからくすねて来たのか、全員がヘルメットを被っている。

誰かが、火薬の付いたピストルを撃って、パンツという安い発砲音が広場に響き、誰かが当たったふりをして呻きながら倒れる演技をする。太一郎が手にした竹光で、毅を切って撃ち取ろうとするも返り打ちに遭った。手加減のない誰かの一撃を背中に喰らってしま

った。本当に手加減ができません奴だ、と嘯いて彼は地べたに触れ伏す。うつ伏せのまま数秒間続けた後、“転生”して戦線復帰できる。

転生が許されるのは、『七生報国』に因んで七回までだった。

草野球をするには人数が少ない。彼らなりの遊びを興じる。中盤になると敵味方の区別もなくなり、好き勝手に叩き合いになっていくのも毎日の恒例だった。

同じ遊びばかりで飽きないのかと言われれば、そうだろうと太一郎は思う。だからと言って、『少年倶楽部』などの雑誌を全員で読んでいるのを大人——特に齋藤老人にでも見つければ、戦地にいる兵隊さんに申し訳ないと思わんのかという具合に怒られる。

戦争ゴッコに飽きているのは、太一郎だけかもしれない。なぜ、毅や恭平は何を好き好んで毎日同じ場所で、同じ持ち物や装備で同じ遊びをするのか、いったい何がしたいのかが彼には分からなかった。

その日も、先に七回死んだのは太一郎だった。誰よりも弱いのは明らかだったが、誰も非難はせずに、「太ちゃんは弱いな！」それだけで済んでくれた。

成績は良くても、やはり体力面でも自分は劣る。太一郎にとって、それが唯一の心配だった。しかし、これはただの遊びだ。学校の成績とは関係はないし、“愛国少年”の称号に傷がつくわけでもない。体力よりも大事なものは、知力と精神。少なくとも、自分には……。

この頃には、その時には遊びが楽しいのかさえ分からなくなっていた。楽しいのだと、自分に嘘をついて余計に深みにはまった。

こんな事がいつまで続くのだろうか。彼はそう思った。

六 夕食と、父の部屋

午後五時に差し掛かった頃、遠方から寺の鐘が響く。それを聞いた太一郎は皆よりも早く“戦線離脱”した。皆の遊びが終わるのはもっと遅いが、誰も顰蹙をしないし、彼の家庭の事情を知っていた。

逆に労いの言葉をかけてくれる。

その時に限って、彼らを信頼したい気持ちが芽生え、早朝の嫌悪感が薄らぐのだが、それもまた夢のうちである。明日の朝になれば、元の木阿弥に戻っているだろう。

夕焼けに染まる空の下、あちこちの家からラジオの放送が流れている。大東亜戦争が始まってから、毎日耳を傾けるように奨励されて以来、太一郎も家に帰るとすぐに茶の間に置かれたそれにスイッチを入れて耳を傾けるようにしている。

井戸の水を湯桶に移し、洗濯物を取り入れたりして（この通りで、井戸と風呂のある民家は限られている）、できるだけ母の苦労を軽減しなければならぬ。神長家における、太一郎が夕方から夕食にかけてやっておかねばならない役割だった。

父が亡くなる前は主婦であつた妙子も、今では電話交換の仕事を手伝いながら、婦人会の会合——それは父が生きていた頃から続いていた活動だったので、体裁を考えると休むわけにはいかないらしい——に参加しているため、どうしても家事が完全に行き届かず、力の要る事を彼に任せるしかなかった。

太一郎も母の苦労を知っている。家の仕事を極力手伝ったり、掃除をしたりして、お小遣いも昔よりも遠慮していた。

辛くもあるが、親に苦労を掛けさせないようにするのも、理想の少国民像だと彼は考えていた。そして、自分はこの家の唯一の長男である。太一郎はいずれか頼られる大人にならないといけないと自らに言い聞かせていた。

「ただいま」

六時前——スピーカーから『少国民の時間』が流れる直前、いつもとは珍しく母が姉と一緒に帰宅してきた。

「お帰り。お母ちゃん、お姉ちゃん」

茶の間では既に『敵ハ幾萬』が雄々しくも軽快に流れ出し、太一郎も何の気なしに口ずさむ。特に理由があるわけでもないのに、ひと際明るい曲のテンポで気持ちが高揚するのは今に始まった事では

ない。

その反面、彼女達の反応は、太一郎が軽く失望するほど冷めている。巴にしても、どうして弟が大袈裟な音楽が流れる度に歌い出すのかが理解できないらしい。

「太ちゃんは、本当にパブロフの犬みたいや」

パブロフって誰だ。どこか外国の偉い人らしいが、変な名前だと思っただ。

「その、パブロフって誰や？」

勝気な姉は、「ちゃんと、辞書を引いて調べや」といつもの口癖で命じる。その後に彼が何もしないまま有耶無耶になるのも定番だった。

女子挺身隊に属していた神長巴は、以前は西宮の航空工場に従事していたが、数か月前の空襲でそれが焼けてしまった。それから仕事場が何度も移り、少し遠い夙川にある工場の工員に治まった。

神戸市のいくつかの工場地帯は3月の空襲で、そのほとんどが焼けてしまった、と聞いている。巴が勤めていた飛行場も、今でも焼け野原のまま放置されているらしい。

色々と工場をたらい回しにされた末、二週間前に西宮の工場に雇われる事に決まったのはいいが、その社長は筋金入りの愛国者であつた。それはいいのだが、厄介なのが小うるさいお局で、男勝りの姉は結構苦勞していた。

女にしては髪が短い姉は顔についた煤を落とす。教師を目指していた彼女は、太一郎に対してやたら説教をしたがる。同じように負けん気のある彼も口喧嘩で応戦するのだが、口のうまい巴に勝つたためしがない。

音楽が終わり、アナウンサーの淡々とした解説が始まった途端、ラジオのスピーカーに頬を近づけて耳を澄ませた。

太一郎にとって、その曲の後に流れる各地の戦況報告――すなわち、大本営発表の方が重要だった。

この日も勝利の報告が相次ぎ胸をなで下ろす太一郎だが、ただ最

近になってから、“転進”なる言葉が多用されているような気がした。その意味を妙子に質問するが、母は肩をすくめながら「負けてはいないけど、戦う場所を変えるっていう意味よ」

あまり齒切れが良くなかったので、「辞書、辞書」と姉に言われた通り辞書を引いてみたが、該当する言葉はやはり見つからなかった。

「軍人さんの造語には、女は疎いのよ」と軽く頭を突ついてくる。

それを払いのけ、「姉ちゃんにも分らん事があるとは知らなかった」

「辞書にないのに知るわけないやろ」

「ほらほら、ご飯よ」

割烹着に着替えた妙子――母はいつも化粧をしていなくても綺麗だと、彼は確信している――が、お盆をちゃぶ台に運んできたので、二人は始めたばかりの口論を速攻に切り上げて、茶の間の隣に位置する奥間へと急いだ。

神長家では、毎日の食事前に行っている事がある。

奥間には、父総爾の仏壇がある。蝋燭と線香に火を灯し、鈴を軽く鳴らすと、三人揃って手を合わせた。亡き大黒柱に一日の無事を祈り、また感謝するのだ。母の提案は不思議にも太一郎や巴が望んでいた事だった。

太一郎にとって、（彼自身もそうだが）普段から寡黙であった父親に関して記憶している出来事は、たった二つしかなかった。

一つ目は、六歳の頃。一二月月上旬の早朝、「遂にやった！」と家の外に出て連呼する大人達の熱狂を、十歳になった今でも強烈に覚えていて。それほど、異常なほどの熱と歓声が周りを包んでいたのだ。戸惑いに、困惑、そして決して少なくはない、歓喜乱舞と共に拳がる万歳の諸手の群れ。

まだ幼かった彼の耳の入ったラジオ放送の臨時ニュースの音声は、『……リクグンハホンヨウカ……タイヘイヨウニオイテ……米英トセントウニ……』と断片的に伝える。

自分には分からない、何か大変な事が起きている。今までないよ

うな大事で、大人達が大騒ぎしている。喜んでいる人の方が多いから、面白い事があったのだろうか、当時の太一郎は漠然とそう考えていた。

それからその日の学校――彼が入学した年には、なぜか尋常小学校から“国民学校”と名称が変わった――では、そのニュースが自分の国である大日本帝国がアメリカという外国――今の鬼畜米英の米の方だ――に戦いを挑んだ、つまり宣戦布告したという内容であるのを先生から聞かされて、更に夕方に家のラジオで何度も流れた教師の説明と同じ放送を聞いて初めて理解した。

一人だけ、父の総爾は皆のように喜んだりはしなかった。只、何も言わず腕を組んで頬骨をしきりに手で摩る。

それが、父が困ったり焦ったりした時にやる癖だと、幼いながら彼は知っていた。

鬼瓦のように険しい顔をした父の顔は、真珠湾奇襲のあった、昭和十六年の十二月八日を想い起こす度、脳裏に浮ぶ。

二つ目は、その父の死。戦争が始まって二年後、職場で父が突然吐血して倒れた。再発した結核に医者も匙を投げた。止むを得なく、総爾は自宅で療養する事になった。

激しい咳と吐血を際限なく繰り返す総爾を、二人が看病する傍ら、太一郎は部屋の入口から顔を出して覗き込んで見守った。

床に伏す父は、見る影もなく痩せこけていたが、一度も息子にその顔を向けようとはしなかった。子供は外で遊ぶ。病気が移るぞ。静かにそう言う父と、母に促され追い返された。入れ替わるように、タライに新しい水を入れた巴が部屋へと入って行く。

今も、なぜ自分を追い出したのか分からずじまいである。

あの寡黙で、趣味も盆栽か読書――父の部屋の書棚に占められているのは、夏目漱石や森鷗外、芥川龍之介やドイツの小説家や哲学書の類ばかりだった――しかなく、特に悪戯をして怒られたり、折檻されりした思い出もあまりなく、それかあらぬか太一郎にとって、父はよく分からない薄弱な存在だった。

四年生になり、学校で父親について書けという類の宿題が出て、本人を想起しようとする目のが霞んでしまう。顔のない案山子がかこ仕方なく、自分が理想とする像を書いて美化するしかなかった。それでも、母が喪主を務めた葬儀では、太一郎は終始涙を隠そうとはしなかったのは、既に記憶から消えている。

「お父さんも、考えてみればこんな時期になる前に亡くなったのもよかったかもしれんね」

目を閉じながら、巴の放った一言を咎めるように、「巴ちゃん、滅多な事を言ったらいいけんよ」

未だに合掌したまま目を閉じて、彼はそれを聞いていた。姉がそんな事を言ったのは初めてだった。それが何を意味しているのかが分かった途端、誰かが聞き耳を立てていないか心底冷や冷やしたものだ。『非国民じゃ』と罵られかねないからだ。

姉は静かな声で謝った。そして言葉を続けた。

「でも、あの時のお父さん、とても辛そうやった……」

とても辛そうだった。桶に溢れるばかりの血を吐いて、一日中、苦痛の声を上げていた父を思い出し、もしかしたら姉の言葉も一理あるかもしれないと思った。

「辛い事いうんは、いつまでも続かへんもんよ。良い事がずっと続かんへんようにね」

母の眼は壁にかけられた父の慰霊に注がれている。そこにかつて元気だった頃の――幸せだった時期を見出そうとしているようだった。姉も同じようにしていただろう。

「そうね」静かな声で、巴は言った。

茶の間のラジオが、今日の戦況を抑揚の著しい声で淡々と告げている。連勝に次ぐ連勝、そして転進が少々。三月から始まった沖縄の戦いがどうなったのかが気になるが、最近ではほとんど聞かなくな

った。いつも背中を向けて、寡黙な父しか知らない太一郎には過去に耽る二人が羨ましかった。何も知らない自分だけが置いてけぼりにさ

れ、とても齒がゆい気持ちになった。

米印にテープが張られた窓から入る夕日が奥間と茶の間を赤く染め上げていた。彼にはそれは血に見えて仕方なかった。

こうして同じ毎日が過ぎていく。さすがに、彼自身もそれが永遠だとは思っていない。いつか大人になり、兵士となって敵と戦い、そして死んでいく。そんな将来像は漠然ながらあった。その時まで自分は誰からも尊敬され、誰もが認める愛国少年の鏡でいられる事を信じて疑っていなかった。

世の中は、ただ流れてゆく。

何の脈絡もなく、その一言が脳裏で浮かび、太一郎は思わず目を開けた。異国から海に流れてきた瓶のように流れてきたその言葉を反芻した。そして何かを訴えるように、仏壇の上に掛けられた父の遺影を見つめた。

白黒に映る総爾は、無表情——その顔はどことなく、息子に似ている——のまま、虚空を向いていた。

これが、太一郎少年の一日である。明日から、その流れは変わる。

世の中は、ただ流れてゆく。

そして、それは誰にも止められない。止める必要などないのだ。

《次回へつづく》

第一回 あるところの少国民（後書き）

本作が初めての長編、連載、歴史物（昭和ですが）になります。初めて尽くしの劣作のため、お見苦しい点多々あるかもしれません。が、一度でもご拝読いただけたら幸いです。

なお、本作の参考文献につきましては、最終回の後書きにて掲載します。

次回から、毎月の第一金曜日午後9時に掲載します。

第二回 転校生が来た

世の中はどんどん流れていく。

太一郎が六歳の時に、戦争が起こった。その二年後には父親が死んだ。

それから、臆病者で気弱だった少年は、愛国少年の優等生と持てはやされた。

彼は満足していた。何も変わらずに大人になっていくのを強く望んだ。

しかし、それがあまりにも非現実なのをどこかで分かつつ――。世の中は少しずつ変わっていくのだ。

一 東京から、わざわざ

その日は、いつもと少し違っていた。

丁寧な七三の頭をした担任の玉田先生が、いつもの通り生徒達の一人一人の一挙手一投足を見張るように、銀縁の眼鏡の奥からギョロ目を動かし（ついでに無意味なほど神経質そうな顔をしている）、早歩きで入室する。

普段通りヨレヨレの一丁羅に、不釣り合いの下駄を履いて、まっすぐ教卓へ向かう。そこまでは、何一変わらない日常の光景だった。否、一つだけあった。この日の彼は、引き戸の扉を開けたままにしている。

「入って下さい」玉田教諭が、扉に向けて言った。「はい」と静かな声が返事をする。

少し太めの少年が一人、四年二組の教室に入ってきた。

静かだった教室に小さなどよめきが起きた。全員の目が見慣れない児童に釘付けになる。太一郎もやはり、同じくそうであった。

その男子児童は自分達とは明らかに違う身なりの良さをしており、血色の良い顔は、この町では見かけないどころか、まるで次元の違う存在感を醸し出していた。

転校生。太一郎は思い出したように、やっとその言葉に辿り着いた。

玉田先生と似た眼鏡から覗く細目が、教室中を見渡す。

一瞬目が合ったような気がして、太一郎は一瞬背中に悪寒を走らせた。後ろが空席なので、そのままのけ反るところだった。同時に、確かに目つきは怖い感じだが、小太りな体格はそれと相反していておかしく思えた。

先生は、大東亜地図と校訓が模写された額が真上に掛かる黒板に彼の名を板書する。小太りの転校生は、『半田貴一』という名前だった。

「今日から、君達と一緒に勉強する、半田貴一君です。半田君は東京の出身だが、御家の事情から特別に入学が許可されました。早く仲良くなるように」

相変わらず、癖のある訛りで説明した玉田先生は、よりによって太一郎の後ろの空席に座るよう貴一に指示した。

通常、学区ごとに、そこに住む児童が通う学校は決められているので、転校による越境入学は“原則的に”許可されていない。当然ながら、生徒達はそれを知る由もない。

事情を知る教師達だけは、その越境転校が特例で許された理由の背景に、貴一が一介の庶民ではない、やんごとない生まれであるのを心得ていた。その実家が経営する企業が、軍と共に国を動かす数少ない財閥の一社に名を列ねているのなら尚更である。

一時間目の修身の授業後、案の定、貴一の席には人だかりができていた。前席に座る太一郎も、何気なく聞き耳を立てた。

皆が尋ねている内容——東京はどんなトコ、空襲がどんなだったとか——を予め知っているかのように、貴一の受け答えは簡潔で迅速ではっきりしていた。

「僕が通っていた学校は、前の空襲で無くなったんだ。それで、お父さんが頼んでここに引っ越してもらったんだよ」

癖のない関東弁で話しながら、貴一は眼鏡のずれを直す。

二ヶ月前に東京がB29の空襲を受けたのは、ラジオの放送を聞いて知っていたが、被害は最少だったはずなのだが、貴一の話す内容はおかしいほどに何から何まで間逆だった。

「向こうはもう大変だったよ。建物が全部ダメになって、食べ物もお金も何もなくなってさ、人も大勢死んだよ」

「ホンマか？」 毅が驚いた様子で聞き返す。

「ホントさ」

その時、貴一が失笑しているようだった。あくまで、太一郎の見間違いかもしれないが。

その日の休み時間や昼食のほとんどが、貴一への質問攻めで終始した。そのためか、太一郎の周りには誰も寄ってこなかった。昨日までの休み時間は、名前とは名ばかりに太一郎が休む暇もなかった。相変わらず話を聞きたがる者や、勉強を教えてもらいたがる者、果てには宿題を写させてほしい奴までいた。

今では、貴一少年が昨日までの彼の立場を引き継いでいた。

ここ数日は、こんな状態が続くだろうと太一郎はなんとなく確信した。そして、できるならそうあってほしいとさえ思った。

貴一は見た目通り、やはり抜群に優秀だった。例えば、算数の時間では算盤を誰よりも早く――太一郎は、手先はあまり気ようではなかったのに算盤だけはあまり早くなかった――暗算を弾き出し、理科の実験でも彼の班がいち早く終了した。

彼曰く、「向こうの方が進んでいた」という。

それが見ようによっては嫌みに映るほど露骨ではある。しかし、毅や他の級達は意に介さず、すっかり貴一の周りに集まるようになっていた。初日でそうなのだから、次の日にはどうなるのか。想像するだけで太一郎の期待は膨らむばかりである。

その期待が数日後には不快感へと変わろうとは、彼は想像もでき

なかった。

二 いわゆる、鼻屑

その朝も、何かが違っていた。

朝霧がかすかに漂う中、神長家の門前に出た太一郎は、いつもの風景に違和感があるのに気づいて思わず立ち止まった。

違和感の理由が、あまりにも静かな事だった。

警戒警報は流れていなかったのも、おそらく空襲ではないだろう。それに今日は平日だから何か訓練行事はなかったはずだ。向かいの酒屋を見ると、いつも通り営業を始めて、店先では幼馴染で知恵遅れの春乃がいつものように適当に箒を掃いていた。

防火用の水槽の近くには、いつも通り三年生までの下級生——彼の班では、四年生が最年長である——が既に列を成して待っていた。閑散としていた理由が分かった。明らかに班の人数が足りなかった。

道の真ん中に腰を曲げて敬礼をする老人がいる。痩身に似合わぬズカブカの軍服——それはどう見ても今の軍服よりも古く、遠くからでも糸がほつれ色褪せているのが分かるぐらいだ——を着ている齋藤という名前の在郷軍人が、遙か遠方にある皇居に向けて欠かさない毎朝の儀式をしていた。

齋藤老人を一瞥し、「毅と恭平はまだかいな？」

「まだ来ておりません」舌足らずな敬語で下級生が答える。

「何やっとなのや、二人揃って……」

二人の不在が、静かな朝の原因だったのだ。いつもなら、『神長様や!』だか『神様じゃ!』とか奇声を喚きながら、こちらを出迎えていたものだ。

頭を掻いた太一郎は隣の荒岩家も訪ねてみた。おばさんはもう息子が学校に行ったのだと言った。やけに早い時間に学校に出かけたらしいが、それでは規律違反じゃないか。

太一郎は、学校に着いたら毅達をどう咎めるか考えた。自分達の行為が、班にどれだけ悪影響を及ぼすのかを分かっているのだろうか。どうやら、連帯責任の大切さを毅達に改めて叩き込まなければならぬ。

太一郎の中に忘れかけた義務感が湧いてくる。

毅達が既に学校に行ったのなら仕方がない。もうそろそろ定刻の時間も迫ってきている。このまま立っているわけにもいかないだろう。馬鹿みたいに待ちぼうけの末に全員遅刻なんて、あまりにも間抜けすぎて笑いも出来ない。

「しゃあないから、出発するで」

太一郎は数少ない児童を連れて登校を始めた。

別の集団が高らかに軍艦マーチを斉唱しながら列をなしているの、負けるものかとこちらも別の歌で対抗するも、やはり数ではあちらの方が多く、蚊トンボの鳴き声みたいに尻すぼみになり、誰も歌わず無言になってしまう。

その気まずさにいたたまれず、別の歌を考えようとするが、同じ結果になるのではとしり込みしてしまう。

惨めな気持ちで沈み込んでしまいそうになった太一郎だが、この日はなぜか、いつもなら見過ごしていたものを視界に入ってくる余裕があった。

通り過ぎる電柱には、新しく貼り直された張り紙が目につく。昔ながらの『贅沢ハ敵ダ!』、『欲シガリマセン勝ツマデハ』に代わり、『一億玉碎!』やら『神州不滅』が増えてきた。中には古い物の上に重ねて貼ってあるものもある。

太一郎としては、切羽詰まったようなこの文句があまり好きではなかった。ポスターの色もどこことなく色彩を欠いている。

他にも、未だに金属類の供出を謳うポスターがあった。父のいた頃に、大きな鍋やフォーク、食器や格子など集めた記憶がある。我が家では、確か特大のすき焼き鍋と自転車を提出したはずだった。

近くに掛かる橋に至っては、欄干が根こそぎ抜き取られている有

様だ。

他にも景色を巡らせると、眠そうに自転車を漕いでいる憲兵。ゲートルの学生姿やモンペ姿が乗り込んだ電車が高架を通過していく。どこかで、「万歳！」と声を上げるのが聞こえたので、また誰かが出征していくのだろう。

太一郎は自分がいずれ大きくなり、戦争で戦って死ぬ将来を深く考えたことは少なかった。そこに、恐怖や不安を抱く前に、すべてが漠然としていたのだ。

時々読んでいる雑誌『少國民の友』にも、死んだらどうなるかはあまり書いていない。登場する兵隊——誰もが一樣に凜々しい顔をしている——の死ぬ姿もあまり見た事がない。

学校での授業では、死んだ兵士の魂は靖国神社へ行くのだという。そこが一体どのような場所であるかも知らないのだ。

第五国民学校の校門をいつもように礼をして通り、下駄箱に着いた時、太一郎は同じ教室の数人かが連なって歩く後姿を捉え、そこへ走り寄った。毅や他の級友も一緒だった。

太一郎は袖を捲って、後ろから拳骨をしようと意気揚々と近づいた時、彼らの先頭に立っている者に気づいた。

何やら得意げに話している貴一は、今日も特別な日でもないのに綺麗な学生服を着ている。毅や恭平達は彼の後ろをヒヨコのようについて回る。

「おい、君達！」

太一郎の返事に、貴一達は振り向いた。せつかくの話を中断されて、不機嫌そうな顔を一齐に向ける。

「集団登校を無視して、何してるんや。今朝はなんで家の前にいなかった？」

毅は嫌々そうに「太ちゃん、悪かったな……」

まったく悪気があったのを詫びるようには見えない。

「一緒に誘ってあげなくてごめんな」

毅の無神経な言い訳に、声を荒げそうになる。

「そんな事やない！」

「いいじゃないか。僕が悪いんだよ」

貴一が二人の間に立つ。よく見たら、二重顎と少し前にはみ出ている腹が、太一郎には今のご時世には珍しく思えた。そして、なぜか今朝食べた、天井を反射して映す雑炊が脳裏に過ぎり、大した御身分だと内心毒づいた。

空いた腹が音を鳴らすのを誤魔化すために咳払いする。

「半田君が？」

「僕がね、荒岩君らを誘ったんだ」

「君の家と、僕達の家は正反対やで。君は自分の班と登校しているんか？」

「悪いけど、僕は車で通ってるんだ。学校にも許可をもらってる。彼らに話すと、乗せてほしいって聞かなくてね」

いつの間にか、気取った話し方になっている。

「太ちゃんも一緒に来るか？」貴一の隣から、首を伸ばすように毅が言う。

「僕は……」

貴一が、彼の返答を塞ぐように言い放った。

「ごめん。家の車、四人乗りなんだ。僕と運転手の書生と、それと林田君と荒岩君で満員になる」一年生でも分かる理屈に指を折って説明し、貴一は言葉が続けた。

「だからね、君は乗せられない。席がないから仕方がないのさ」

誰が乗るものか。友人みたいに口がもう少し軽ければそう答えていただろうし、事実そう言いたかったが、太一郎は自分にそんな度量などないのを知っている。太一郎はその場に佇んでいた。それを通り過ぎて、貴一達三人は教室へ入って行った。

誰かが彼の肩にぶつかり、「危ないな」と注意されるまで、太一郎は茫然と立ち尽くしていた。朝から込み上げていた感情は、不安定なまま左右に振れている。一体どちらが自分にとって良いのか悪いのか分からない。

そんなに金持ちが好きなのかよ。

そして自分が嫉妬しているのにおかしく思えた。今の貴一に置かれた状態がかつての日常だった。誰もがもしない武勇伝を聞きたがり、金魚の糞のようについて回る。それが煩わしくて嫌だったはずなのではないか。

余計に考える必要なんてない。荷が軽くなっただけじゃないか。

太一郎は自らに言い聞かせながら、いつもと違って一人で教室へ向かった。

結局、毅達のいない登校日は、翌日もそのまた次の日も同じ事が続いた。

三 放課後

最初、数人ぐらいいは残っていた。そして彼らも去って行き、とうとう、特高の話を聞きに来る友達は一人もいなくなった。

もともと、いじめられっ子だった彼に人が集まっていたのは、父親の話があったからだ。その死後も続いていたのは、ひとえに彼の作る話がうまいのと努力があったからに他ならない。しかし、級友達を魅了する貴一の優等生ぶりは、今までクラスを中心だった自分が徐々に日蔭者に追いやられていく危機感を募らせた。特に、あの朝の一件以来、お門違いと分かっている太一郎の貴一に対する敵愾心は燦っていた。

だが貴一の方が、頭がいいのは動かざる事実だった。彼にも読めなかった文を暗唱しただけでなく、他の皆も知らなかった意味をスラスラと説明してみせる。

「さすがに半田工業の子息だけあって、愛国少年の地位にふさわしい」

あからさまな鼻屑の引き倒しを言う担任の言葉を耳にして、それらがかつて自分に対して言われていた事を忘れたかった。さすが、特高に努められていた御父様がいただけの事があります。皆、神長

君に拍手を送っていた。

太一郎が得意とする国語の試験があった時が一番（彼にとって）ひどかった。

今までの結果のほとんどが【優】——一番点数の高く、その下になる【良】よりも低い点数を取った事は一度もないほどだ——だった彼は、その日に受けたテストは惜しくも【良】——になる事はないうように細心の注意を払い、好成績の称号を得た。

そうだ。内容も簡単な漢字の問題から、児童向けの軍国小説の読解だが、教科書の内容はほとんど把握していると言ってもいい。

太一郎にとっての愛国少年とは、頭の良いだけではない、どれだけ御国のために忠誠を誓っているかが大切だと知っている。金持ちの転校生、それもここに越してきて日の浅い新参加者が、自分を差し置いて、少国民の先陣を切るのは耐え難い事だった。

試験の結果、二人は同じ点数を取った。だが、教室の皆や玉田教諭の賞賛が、半田貴一の方だけに注がれているのは、目を瞑っていても分かった。

成績が並んでも、皆の注目は太一郎に向く事はなくなった。彼は何も言わず、拍手もせずに、前だけを向いていた。背中に目があれば、貴一を睨んでいたに違いない。

登校時と同じく、下校にも変化があった。あの二人は、帰りはそのまま半田邸まで車で送ってもらい、夕方まで遊んだ後、わざわざ歩いて家まで帰っているらしい。

もっとも、太一郎の学校では下校時の集団行動はなかったのも、彼もあまり気にはしなかった。だから、一人出とぼとぼと帰るのに慣れていた。

太一郎が家の前に来た時、知恵遅れの春乃が、いつものように暇な顔をしながら箒を掃いていた。

待てよ、と太一郎は思わず立ち止まる。確か学校に行く時も掃除をしていたような……。まさか今まで外を掃いていたのだろうか？ まさかな、と彼が門を開けた直後、背後から酒屋の親父の怒声が

ほとばしった。

「この馬鹿娘が！　いつまで床を掃いとるんや！」

悪さをした野良猫のように首根っこを掴まれながら店の奥へと引っ立てられる少女にやれやれと溜め息を吐いた。太一郎は笑う気にもなれなかった。相変わらず愚鈍な幼馴染には憐れみを通り越して、何故だか羨ましいとも感じた。

もしマトモのまま、あれだけのほほんとしていればどれだけ気が楽だろうか。

夕刻に近かったが、家に帰った太一郎は自室に荷物を置くと、とんぼ返りで玄関を飛び出して、友人達のいる空き地に向かった。なぜかいつもはあまり気乗りしない遊びも、今日に限って無性にやる気を起こさせた。気が少し弱いだけで、彼も少国民の端くれだと自負している。嫌な失敗など早く忘れてしまえばいい。

今なら、ずっと自分は強くなれる気がしたのだ。

だが、太一郎の元気を残らずそぎ落とす光景が空き地にはあった。何かあったわけではない。そこには誰もいないのだ。

いつもは東と西に別れて陣地を取り合う戦争ゴッコの真っ最中のはずだのだが、どう言うわけかそこは無人であった。

太一郎は土管の中や橋の草むらを覗いたりしたが、武器やヘルメットは放置されたまま、毅達の姿はどこにも見当たらない。

もしかしたら、どこかに隠れて遅刻してきた自分を驚かそうと企んでいるのかと思い、ホロの掛かった防空壕も覗いてみたが、当然だが誰もいなかった。

やはり気配も何もないとすると、まだ誰も来ていないのか。

もう、何がなんだが分からない。坊主頭を激しく掻きむしりながら、理不尽な苛立ちを持て余していた。どうかしている。自分だけではなく、毅や恭平まで今までの日常を忘れたように消えてしまうなんて。

誰かが彼らを唆かしたのだろうか。もしそうなら、その正体は考えなくとも嫌でも分かってしまう。彼は愚鈍ではないのだから。土

管に腰を下ろし、堂々巡りの思案に耽る彼は知っている限りの軍歌を繰り返して小聲で呟きながら時間を潰した。

その日、友人達が現れる事はなかった。

まもなく日が暮れて、そろそろ門限を過ぎようとしていた。諦めて立ち上がった時、はるか前方に奇妙な光景が目に入った。

自分の家の方角の、その後ろに立つ裏山――時々、気ばなしにそこへ一人で行ったりする――の頂上に生い茂る杉の木から、細長い筒のようなものが飛び出していた。

それはまるで、大砲の先のように見えた。

四 失態

家に帰るまで、太一郎は誰とも話さなかった。

体操の授業が終わった後、込み上げてくる不快に耐え忍びながら、残りの授業を受け続けた。そして放課後になると、周りを憚らず逃げるように便所の個室に駆け込むと、間髪を入れずに嘔吐した。

そこに誰もいなかった事は彼にとって幸運であった。もしも誰かの目に触れて笑いの噂にでもなれば、それこそ神経が持たなかっただろう。

「ちきしょう……」

込み上げる心が呪祖になり、言葉として吐き出される。

吐瀉物は普段の食生活が雑炊だけしかないから、ほとんど土気色の汁や、芋の葉っぱや雑多な残滓だけだった。

それらがすべて、便器の穴へと消えていく。口から流れる唾液の筋が、糸のように細くなり、消えていく。同時に涙が頬を伝って床に薄い染みをつくる。

頭を上げた太一郎は正面の壁に誰かの顔と重ね、その個所を力一杯に殴りつけた。

そんな事をして、何か起こるわけでもなかった。やがて腹の虫が喰う風を訴えて鳴くと、拳に込めた力も空気の抜けたタイヤのよう

に萎んでいった。

こんな馬鹿な怒りをぶつけてもしょうがないじゃないか。今日は単なるポカをしたただけだ。いくら少国民だって、一つぐらいの失敗や悩みはあるものだ。

そうさ、明日になったら忘れる。きっと忘れられる。

自分の失敗も、あんな奴も――。

「嘘をつくな」

本音が半開きの口から吐き出た。それを誰かに聞かれたのではないかと思わず口を噤む。

「あの転校生が来たおかげで……やなかったんか？」

それは嘘ではない。しかし安堵の反面、貴一に対する憎さもある。それはどうしてなのかも、太一郎は分かっている。

「あいつが僕より偉いからって、カリカリするんはおかしい。そうや、おかし過ぎる」

小声が段々高くなっているのに気づかないまま、太一郎は十分ぐらい自問を続けた末、周りを窺うように便所から出た。

教室に戻ると、誰も残っていなかった。授業中には気がつかなかったのだが、窓に張られた米印のテープのせいで、とても薄暗く感じる。まるで夜中のようなのだ。

机に寂しく置かれた荷物を持ち、逃げるように学校から出る時も、珍しく人の姿はなかった。外はもう夕日が下がり始め、いつもより門限の時間が近づいているのを教えている。それぐらい、彼は長く便所にいたのだ。

彼が便所で暗い鬱憤を吐き出したのには、その日の授業に原因があった。

はらわたの煮えくりかえるような鼻肩の引き倒しが祟ったのかもしれない。もつとも苦手とする授業である【体操】で大きな失敗をしてしまった。

その日の授業では、校庭に設置された、塹壕を模した凹凸から別の凹凸へと走って移動するのを繰り返す競技をしていた。よりにも

よって、自分の番が来る寸前まで、上の空だった。ぼんやりしていたと言ってもいい。

「神長！ 何しとる！」

強面で、軍隊上がりで有名な鬼頭教諭の怒鳴り声で我に返り、慌ててかけて後れを少しでも埋め合わせをしようとしたが、途中で足が絡んでしまった。

太一郎は頭から地面へ強かに打ってしまった。顎や膝の痛みに悶えながら立ち上がるうとする少年を、後ろに控える生徒達が盛大に笑う。けたたましい鳥が喚くように。

どうして自分はこんな失敗をしてしまったのか。いつもならどんなに遅くとも、こんなポカはしないはずだったのに。

彼らの中に混じっていた貴一と一瞬目が合った。無理な無表情で冷静を保っているように見えた彼は、太一郎の目を避けるかのように顔を伏せる。それが小刻みに揺れているので笑いを堪えているのが嫌でも分かった。

同情してくれるのも思ったのか。あいつはお前が普通の奴よりも愚鈍で間抜けだと思っているのさ。決して、自分と同じ愛国少年だとは思っていないぞ。

心の隙間から沸き上がるどす黒い思惟を掻き消し、太一郎は膝を折って立ち上がると、何も言わず淡々と往復を終えた。走っている時、横腹に少し鈍痛がした。

戻って来るなり、教諭に殴られると覚悟していた。普通なら、それが当たり前だと彼自身が知っている。

しかし、出てきた言葉は予想もしていなかった。

「猿も木から落ちるというのだ、お前は」

そして頭を叩く。しかし、その顔は鬼の頭という名前にふさわしくないほど破顔してニヤついていた。その後、太一郎の班は道具の片づけを任された。連帯責任とは言え、他の者は彼に愚痴を放つ。

「太ちゃん。体育の時もしっかりせえよ」

言われた本人は、馬耳東風のように聞き流していた。だが頭の奥

にその言葉が、川に流れる藻のようにへばりついたままだった。

体育の時もしっかりしてくれよ。または、半田君だってうまく出来ていたのに、太ちゃんも頑張れよ。勉強ばかり出来ても、これじゃあ――。

お前が頑張ればどうだ。太一郎は誰もいなくなった校庭の片隅で、響くぐらいの舌打ちをし、地団太を踏んだ。

その際、膝小僧が少し痛んだ。

五 空襲と砲撃

その晩、二つの光が空を照らした。

太一郎は、まったくもって不快な気持ちのまま床についていた。十年しか生きていないとはいえ、抑えがたい苛立ちが込み上げたのは生れて初めてだった。

すべては、あの東京からやって来た転校生――半田貴一のせいに他ならない。あいつがやって来てからまだ三日と経っていないというのに、こちらの調子がすっかり崩れてしまい、できる事までままたらなくなりそうだった。

確かに最初は、取り巻きが寄り付かなくなって、彼は安穏な気持ちでいられたのは間違いないだろう。無理に先頭に立ったり、今までのように嘘話をこしらえたりするなど、余計な気苦労もなくなり、周囲に気兼ねなく過ごせた。

問題は、たった二日の間にすべてが反転してしまった彼の立場だった。教室の皆は、鼻肩の引き倒しで貴一を無批判に絶賛し、担任の玉田先生も『素晴らしい』の一边倒ばかり言う。今日にしても、今までの太一郎を差し置いて、貴一少年が四年二組の新しい級長に選任された。（彼の学校では、学級の級長は担任の一任で決まる）

今までなら、太一郎だけが浴びていた賞賛を、東京から来た新参者が搔っ攫って行ったのだ、と彼自身思っているのだ。それ自体が悔しくて仕方がない。特に今日みたいな失態など、今まで彼はした

事がなかったからこそ、余計に腹立たしい。

嫌、違う。もう一人の自分がそれを否定しようとする。本当に怒っているのは、毅や級友達の方だ。今まで散々自分を持ち上げておいて、珍しい東京者が越してきた途端に、自分を差し置いて手の平を返したような態度を取る。

ああ言うのをなんて呼ぶんだったか……。

嫌、そうでもない。太一郎は彼らに無視されているのが、一番腹立たしかった。結局、今までの自分は父の存在のおかげで、皆の先頭に立てていただけたのかもしれない。

なんと言っても、貴一の父は大手財閥の子会社とはいえ、半田工業の現社長である。しかも、まだ生きているし、その家族も金持ちで――。

嫉妬。そんなイヤらしい言葉が過ぎり、太一郎は思わず枕に頭を被せた。消えてしまいたいほど情けなく、知らぬ間に目から零れた涙が枕を濡らした。

どうして自分は、いつからつまらぬ矮小な拘りを持つようになったのか。

愛国少年。少国民の代表。決して率先して先頭に立ちたいと強く思っていない太一郎だが、家族にとって自分が誇りになるなら、どんな面倒でも黙って自分からこなしていた。大日本青少年団――二日前になぜか解散になった――にも参加し、司会進行を志願して慣れない演説をたどたどしく思われないよう頑張ったし、消防訓練も両手にバケツを担いで筋肉痛になるまで動き回り、大人に感心されるようにも心がけてきた。

学校でも何度も表彰され、教師や近所の大人達からも褒められ、級友の羨望の言葉を聞いてきたか計り知れない。

それなのに、どうして……余所者のくせに。

ますます感情が高ぶる太一郎だったが、その先の思考を睡魔が阻む。子供の眠りは早い。数分も立たずに小柄な少年の意識は深い闇へと沈もうとしていた。

まどろんでいた太一郎少年は突然、束の間の無意識の世界から叩き起こされた。けたたましいサイレンが鳴り響いたせいである。

すっかり聞き慣れて久しいそれは、彼だけが聞いた幻聴ではなかった。神長家の家族を始め、周辺の世帯の誰もが同様に耳朵を打ったのだ。

うとうとううんんっ。まるで人の悲鳴に似たサイレンは、今年から時折聞くようになった空襲を示す警報であった。訓練で聞いた時とは異なり、言葉にはできない緊張感と言い知れぬ不安を醸し出す。心を掻き乱す耳障りな不調和音はまるで、人喰いの巨人が上げる雄叫びを想起させた。

太一郎は、思わず耳を塞いだ。しかし、被さった指の隙間から高らかな咆哮が嫌でも聞こえてくる。彼は小さく呻いた。

「空襲うう！ 空襲警報発令！」

サイレンに掻き消されながらも、外で誰かが——確か、警防団と呼ばれる人達だ——喉の奥から絞り出すような声で叫んでいるのが微かに聞こえた。

早く、逃げないと——。

蒲団から抜け出て部屋を出た太一郎は、急いで廊下で出て母と姉を呼んで待ったが、全く反応がない。依然けたたましいサイレンは静まらず、外では誰かの悲鳴や怒号が響き渡る。近所の人達が避難を始めているのだ。

「お母ちゃん！ お姉ちゃん！」

もう一度叫ぶが、やはり反応がない。

太一郎は下の階に降りようとした時、自室の窓を仰ぎ見た。そこから強烈な光が漏れていたのだ。それはまるで昼の陽光と変わらない眩しさである。

どうしてそうしたのかは定かではないが、彼は階段に向かう事なく、部屋の窓に近づいた。そこらと同じく米印に貼られたガラスの向こうに映るのは、遙か遠くに光の筋が地面から生えるように空へと伸びていた。

太一郎には辛うじて見えた。山を越えて暗雲を照らすいくつもの投光器が米粒のように小さい何かを捉えていた。まるで、鳥の群れのような、と太一郎は思った。そしてそれらは鳥にしては大き過ぎる。

深夜に鳥が集団で飛ぶのに、どうして投光器が照らす必要がある？　なぜ、それだけでみんなが逃げていく？　これじゃあ、まるで空襲が起きているみたい――。

未だ、自分が寝ぼけているのに気づき、太一郎は頭を振る。

山を越えて、こちらに飛来するのは確かに鳥ではなかった。あまりにも速く、あまりにも巨大で、その全貌が視界に焼きつき、太一郎は悲鳴を小さく上げた。

彼が初めて目にしたのであろう、敵国の戦闘機――B29に間違いなかった。その編隊がまっすぐと迷う事なく、町へ接近してくる。

爆弾を、焼夷弾を落とすに來たんだ。少年は慌てて窓から離れる。早くここから逃げないと。しかし、太一郎の体は縄で縛られたように硬直して動けなかった。自分でも信じられなかった。足がブルブル震えている。情けないという感慨はない。恥ずかしく思う余裕もない。彼はただ、窓から映るB29を凝視していた。

つい三月にも、六甲の近くで大きな空襲があった。太一郎は、母が友人からそれを聞いて知っていた。どこにかしくも建物が残っていないらしい。辺り一面が焦土と化し、大勢の人が死んだ、と。

死ぬ。太一郎は真っ先にその言葉が脳裏を過ぎった。

母も姉も、他の皆もそうだ。戦地ではない。大人になってからでもない。今、ここで自分はここで死ぬんだ。

太一郎はその場で崩れ、丸くなった。目から涙がこぼれていた。まだ何もしていない。ただ愛国少年だと持てはやされていただけだ。それも、あの転校生の登場で終わったが、それでも悪くはなかった。これから死を迎えるのなら、尚更だ。それぐらいしか思いつかない。

二人はどうしたのだろうか。もしかしたら、自分だけ逃げ遅れた

のかもしれない。それなら、やっぱり愛国少年なんて似合わなかったのだろう。

当の半田貴一は今頃、どうしているだろうか？ 金持ちの坊ちゃんなら今頃無事に逃げおおせているに違いない。そして、ついでに毅と恭平もちやっかり車に乗せてもらって一緒に避難していたりする。

君の席はないんだよ。憎らしい貴一の言葉が蘇り、太一郎は苦笑した。そして、今そこにいるはずもない本人に向かって話しかけた。貴一君の方が愛国少年にお似合いだよ。そこらへんにいる餓鬼大將よりも、余計たちが悪い――。

その時であった。頭の中が爆発したような気がした。

突如、警報音を掻き消すほどの轟音が背後で響いたのだ。太一郎の体はなんとか動いたが、その音のせいで茫然自失に陥っていた。周りの喧騒が聞こえてこない。ツ―と耳の奥でかすかに聞こえているだけだった。

突然の出来事に、初めは近くに爆弾が落ちたのかと思った。しかし、何かが違うような気がする。鈍感になった耳が、また例の砲撃音を拾った。

「砲撃音？」

空から落ちたものじゃない。それは地面から放たれたのだ。

薄れかけた記憶を掘り返すために、彼は何を考えてか窓を開けて身軽な身のこなしで屋根に上った。荒が得難い衝動に従いながら裸足で瓦の上を四つん這いに登る太一郎の耳に、再び自分のいる後方から響いた。さっきよりもずっと鮮明だった。

家の間後ろは、小さな山がある。時々そこで遊んでいたから知っている。

振り返った彼の視界にその光りが映った。ちょうどその裏山の頂上――杉の木が生い茂るそこから、赤い光が放たれる瞬間を。

そして、その赤光が照らし出した細長い鉄の筒が刹那が見えたのだ。そこから、発射された轟音が一筋の光となって空を一直線上

に駆けていくのを。

太一郎は思わず、拳を振り上げた。普段抑え込んでいた感情が雄叫びになって、夜空へ響く。それを掻き消すように、砲撃音が今度は連続してほとばしった。

山間部から抜ける夜風が、背中に強く流れて押し出してくる。

B29の蜘蛛の子を散らすように旋回して一斉に後退した。その姿が徐々に小さくなり、やがて彼方へとその姿を消していった。

裏山の頂上からは、硝煙が残り火のように漂っていた。

思わず見とれていた太一郎を呼ぶ声が聞こえた。母の妙子と、姉の巴だった。どれぐらいの時間が経っていたのか、いつの間にか警報も鳴り止み、漆黒の空を照らす投光器の光も消えている。それぞれ家路に向かう人達が見える。

空襲警報が解除された。少なくとも、今夜は無事に済んだのだ。

門前にいた二人の傍には、風呂敷に包まれた荷物がいくつも置かれていた。家裁道具を以って避難しようとしていたため、太一郎の声が届かなかったのだ。

その時、彼の首を掴む者がいた。

酒屋の娘にして、知恵遅れの春乃が「怖かったよう!」と叫びながら、首を締めてくる。今夜ほどでもないが、空襲警報が出る度にそんなに目に遭っていた。駆けつけてきた二人に引き離されてやっと解放された。

月影酒屋の両親に引っ張られて家に消えていく彼女を見ながら、三人で家に戻って、手短に片付けを済ませた。特に爆撃もされていないので明日は普通に学校があるだろう。また、優等生の活躍を日蔭から見物しなければならぬわけだ。

彼はふらつく足取りで寝ぼけ眼をしたまま、部屋の布団へと直行した。しかし眠りにつくまで、耳の中で暴れる砲撃音はしばらく止まなかった。

どうせ、自分がいなくとも誰も気にしないだろう。風を引いた具合が悪いと言いついてみてもいい。明日の放課後、裏山へ行っ

てみよう。

先の劣情と打って変わり、太一郎の心は躍った。

《第三回へ続く》

第三回　それで、彼らは出会った

一　知恵遅れの春乃

太一郎たいちろうの家の背後には、小さな裏山がある。

そこは街を囲うように連なる山々よりも少し大きく、どちらかと言えば、高台と呼ぶ方がふさわしい。しかし、六甲と比べれば米粒に等しいだろう。

それでも、一人になれる場所でもある。

放課後や夏休みの時間のほとんどを、穀達と空き地での戦争ゴッコや家の手伝いで潰していた太一郎は、時たま彼らに何か用事にかけて遊べなくなったりすると、この小山に向かう事になっていた。平日でも、少しでも暇ができると雲隠れする。

そして、最近では、すっかり彼らが貴一とつるむようになったため、この見晴らしの良い山の中腹に腰を降ろす時が以前より多くなった。

そこからの眺めは、茂張の町を一望できるだけでなく、学校の後ろに控える隣町の商店街から、そのまた遠くの西宮、そして遙か遠くにそびえる山群の山の端や、天気によってはその後ろに控える尾根の描く稜線まではっきりと観られる。

さらに、骨身を惜しまずに頂上まで登れば、逆方向から太平洋の近海と地平線までの絶景を拝めるのだが……。

彼にとって、ここはいわば憩いの場である。辛い時や嫌な事があると、裏山へ来ては心を落ち着かせている。二年前、父が亡くなつて間もない頃は特にそうだった。

そうして下山すると、女々しい自分に恥ずかしく思つて、明日へのやる気を鼓舞するために忘れるようにしていた。その繰り返しは恥ずかしくても、太一郎には必要でなくてはならない儀式のような

ものであった。

もつとも残念ながら、今のところはそうではなくなり、安息が必要な太一郎を大いに悩ませていた。それには二つの原因がある。

一つは、最近知らない間に中腹寄りの地点に張り巡らされた、頑丈な鉄条網のせいだった。いつ誰が設置したのかは定かではない。それよりも、今まで自分だけの隠れ家だったのに、という思いが強かった。

当初、【ココヨリ先、立ち入ルベカラズ】の看板を、太一郎は憎らしげに睨んだものだ。諦めるのも、また早かったのだが。

そして、もう一つの不満が、太一郎少年の真横にいた。

まさに黄昏時である絶好の時間帯、外に開放されて広がる草むらに腰を下ろし、夕空を眺める太一郎の真横を陣取るように座り、その少女は時々こちらの顔を観察しつつ、画用紙にクレヨンを目まぐるしく走らせていた。

まるで罪人みたいじゃないか。指名手配の絵でも描いているつもりなのか。太一郎は疎ましく思いながら、何も言わずにじっとしているしかなかった。どこに行こうとついて来るのだから、こちらは逃げようがない。

彼女は向かいの酒屋の娘、月影春乃である。いつものボサボサのおかっぱに、女子の常服となつて久しいモンペ姿は、だらしなく左肩を露出させ、おまけに靴は踵を踏んでいる。この物資の少ないご時世でさえ、絵の具で口紅の代用で塗る女性もいるというのに。服に付いた名前と住所がなければ浮浪児に間違えられても文句は言えない。

それほど、春乃の身形は汚らしかった。これに知恵遅れと来ているのだから、親も匙を投げて折檻するのも頷ける。

今の時期に、いてもいなくても同じような奴は、厄介以外の何者でもない。

「いつまで、こうしとるんじゃ？」

太一郎の顔をチラチラ見て、画用紙に贅沢品のはずのクレヨンを

走らせる動作を途方もなく何度も繰り返す春乃が、ぼんやりした顔をこちらに向けて口を開いた。

大きな目はまるでこちらの考えを見透かしているような感じはするが、間の抜けた犬のようにトロンとした瞼は、やはりそんなはずはないと同時に否定できた。

間近なので、余計“のらくら”に見えて仕方がない。

夕日が沈むか、お前がいなくなるまでだ。そう放つ力も出ず、太一郎は溜め息を吐いた。山間部から流れる心地よい涼風が、彼らの頬を優しく打った。

「お前はホントに、苦労知らずやから羨ましいな」

「そんな事ないよ。今日もお父に殴られたんじゃ。力一杯で。おめえは気違いのガキやから、学校に行けんし、挺身隊にもなれん。御国の役にも立たん、ごく潰しじゃと言われた」

春乃の両親は神長家の向かいで、江戸の末期から三代続く酒屋を営んでいる。しかし、戦争が始まって間もなく大事な後取りの長男、次男、三男と年の近い息子達が相次いで出征してしまい、今年になって三人の戦死の悲報が入った。

後に残ったのは、長女の春乃は知恵遅れだけ。養子を取らない限り、お先真っ暗だ。

「うちが学校は行きとうない」

「馬鹿やからな」

太一郎の言葉に、彼女は大仰に首を振る。「学校行ったら、皆に苛められるけん。そやから……」ヒキガエルみたいな大きな目で空を仰ぎ、少女は大声で宣言した。

「わしは……絵描きになりたいんじゃ！」

驚いて後ろに転んだ彼は、「勝手になつとれ……」

知恵遅れの絵描きなんぞ聞いた事がない。しかし、それでも太一郎には意外だった。一日中をデクノボウのように外を掃除して終わる春乃が、自分の将来を――出来るかどうかは別にしても――決めているとは知らなかったのだ。

太一郎が向き直って落ち着こうとした直後、不意に「思い出した！」と叫ぶ春乃に驚いた拍子に、再び後ろに倒れてしまった。あいにく場所が悪く、ちょうど地面から抜き出た石に後頭部を強く打った。

「なんなん、藪から棒に……」

今日は、やたらよく叫ぶなあ。頭を抱えながら、太一郎は聞く。まだ、痛みが残っているせいか、目の前に星がチラついている。

「うちは見たんじゃ！」見た物が抜けている。「何を？」

「この天辺に、でっかい、でっかい大砲があるんじゃない？」

「大砲？ お前も見たんか？」

太一郎は昨日の記憶を呼び覚ました。夢現に垣間見た、赤い閃光を発射した筒。あれはやはり幻ではなかったのだ。

「いつ見たん？」

「昨日の夜じゃ」

空襲のあった翌朝、それとなく尋ねても毅や恭平も知らない様子だった。それを知っているのは春乃と自分だけ。

そうだとすれば――。

子供特有の好奇心が芽生え、太一郎は心を躍らせた。それとは別の優越感――一体誰に対して？――も湧いてくる。

「ハル、どこで見た？ 案内せえ」

ハル――月影春乃が知恵遅れと分かるまで、太一郎や他の男子は一緒に遊んでいた。その際、なぜか彼だけをしっかりと覚えていた節があった。

彼女にものを頼むなんて、これが初めてかもしれないと、太一郎は思った。

「お安い御用じゃ」

誇らしげに胸を叩いて立ち上がると、春乃は脱兎のごとく走り出した。太一郎が必死に走って追い抜こうとするが、少女の足はそれよりもずっと速い。足場の悪い山道を一気に抜け、斜面を難なく駆け上がっていく。

まるで山猿のような走りに、見失わないよう必死で後を追いかける。

山道は逸れていき、二人はどんどん獣道へ進んでいく。足場が急に悪くなる。急ごしらえで付けられた手すりや、木の板を貼った階段もない。そこは、落ち葉で敷き詰められて、足場が滑りやすい。さらに、今月から続く梅雨のせいもあってか、斜面には長い竹が雨後の筍よろしく天まで伸びて空を薄暗く覆っている。

新緑の豊かな山というのは、頂上に向かうほど、草木が生い茂っていき天井が暗くなる。二人が走る勾配の激しい山道は、まだ夕日の眩しさが著しい黄昏時にもかかわらず、足元がおぼつかないほど薄い闇に覆われていた。

それでも少年は、地に手を突いてゆっくり上を目指す。すでに、顔や背中に汗が流れ、足も棒のように硬くて言う事を聞かなくても同じだった。

逆に、春乃は体を前に傾け、重心を利用してずっと先を進んでいる。太一郎は、山猿と呼んだが、新たに改めようと思った。

あれは猿どころじゃない。天狗だ。

息が切れかけた時、前方を突っ走る少女が止まっているのに気づかず、そのままぶつかってしまう。いつの間にか、例の鉄条網が聳える個所に到着していた。

二人は重なるようにその場に倒れた。先に太一郎をはね退け、春乃は土で汚れた顔を上げて起き上がり、そして言った。

「あそこじゃ!」

彼女の指さす方向には、鉄条網の下にある地面が抉られ、自分達なら何とか通り抜けられるぐらいの隙間が生じていた。

狸か狐が掘ったのか、さては春乃が掘ったのだろうか。

「太ちゃん、何しとるんじゃない?」

すでに向こう岸にいた彼女が呼びかけるのを聞き、胸の激しい鼓動と背中と顔にどっと流れる汗に戸惑いながらも、太一郎は身を屈めて小さなトンネルを匍匐する。

まさか、電気は流れていないだろうな。少し前に読んだ本の中には、高電圧の流れる鉄条網があったのを思い出し、太一郎の体は硬直した。

「どうしたんじゃ、太ちゃん？」

「ハル、初めてここを通った時、大丈夫だったか？」

「何がじゃ？」能天気な顔が上から見下す。

「痺れたり、せんかったか？」

「知らねえ」

よく考えれば、電流が流れているなら、生きているわけがない。だからと言って、わざと触って自分で試すわけにもいかない。太一郎は脱兎の如く、隙間を通りぬけた。体育の時間の匍匐前進の訓練の時よりも素早かっただろう。

二人は、鉄条網の向こうへと消えた。その先には、人の歩く道があった。

二 砲台と青年兵士

そして、ついに二人は見つけた。昨夜のあれは、やはり夢ではなかったのだ。

両端が煉瓦造りの壁を背に、春乃に続いて太一郎は恐る恐る歩いた。

「ハル。まだ着かんのか？」

一度足を止めて、太一郎は尋ねた。足が疲れたのもあるが、さすがの彼も不安になって来たのだ。同じ風景がいつもまでも続き、かれこれ一時間登り続けているような気がしたが、頂上が見えてくる様子の兆しが一向にない。

太一郎の言葉に一瞬振り向いて、「もうすぐじゃ」とだけ言うと、何も無いように奥へと進む。ホントに、山猿みたいな奴だ。

悪態について、少女を睨む。だが、膝に掛かった疲れが消えるわけでもない。それに山の中なので、じっとしていると耳元を蚊の羽

根音がかすれる。

少年は、それがどうにも我慢できなかった。

「もし嘘だったら、ただじゃ済まんからな」

春乃が急に立ち止まった。もう一度こちらを振り向いた。その顔は、口を大きく広げてまるで何か楽しげな感じだった。

「な、なんや？」

「もし嘘やったら、太ちゃん、どうするん？」

「そんなん、拳骨に決まってるやんか」

「本当やったら？」

春乃の予期せぬ追及に、太一郎は言葉が詰らせた。なんで、いきなりそんな事を？

「本当やったら、ハルの言う事を聞いてやるよ」

ニンマリと広がっていた口が閉じて、少女は前進を再開した。一体、何なんだよ、こいつは。毅達の前とは態度がまるで違う。

もしかすると、バカにされているのでは。太一郎は何となくそう思いようになった。これでは、本当に頂上に大砲なんてものがあるのか眉唾物だ。

塹壕のように狭い通路――いつの間に、こんなものが造られているのだろうか――を抜けると、ポツカリと空いた空間に出た。周囲の樹木が内輪にしなり、テントの要領で空を絶妙に隠し、木漏れ日が無数の糸が光の筋となって足元へと降り注ぐ。

空間の中心に砲台があった。春乃の話は本当だったのだ。

眠っている猛獣に近づくように、彼らはゆっくりと歩み寄った。

周りの木々や岩、草や花からは浮いて見えたその巨体は、あまりにも場違いな存在だった。少しでも自然に溶け込むよう、迷彩が施されているが如何ともし難い。

5間（約10メートル弱）は優に超えるドーム型の物体。半球の屋根から一本の長い筒が突き出ている。その先が周りの杉の木を越えて、空に仰いでいる。

『少年倶楽部』、『少國民の友』……。太一郎はいくつかの雑誌

にあった図説や挿絵に記憶の糸を手繰らせたる。

「これは……加農砲^{カノン}や」

「かのおほお？ 何じゃ、それは？」

春乃を無視し、彼はその砲台へ手を触れられるぐらいに近づく。父が亡くなる前、まだ幼かった太一郎は家族と共に近くの海岸にいくつかの加農砲が配置され、その演習で試し撃ちを見物したのは覚えていいる。指揮官らしき兵士が『てっ！』と叫んだ瞬間、耳をつんざく轟音が響き渡った。

その日はずっと翌日まで耳鳴りが治らなかったのは記憶に残っている。あの時と同じものとは限らない。それに、あの加農砲と比べると、全体的に小さいかもしれない。

しかし、大砲の前に回り込んでその筒穴を覗くと、やはりとても大きい。敵の航空機を撃ち落とすのだから、当然だろう。

二人は完全に言葉を失っていた。今までこれほどの兵器を近くで拝んだ経験はない。すべては本の中で終わっていた。

それが今、眼前に鎮座し、手に触れる事ができるなんて。先刻まで喉が完全に干上がってカラカラになっていたのに、今でもその感覚が麻痺して渴きを感じない。

だがおかしい、と太一郎は首をひねった。そんな大砲がなぜ、自分の家の裏山の頂上に置いてあるのだろうか？

太一郎は手を伸ばして、大砲の下部と付け根のあるドームの壁に触れたが、その刹那、冷たく硬質な感触に、思わず手を引っ込めた。電撃が走った錯覚に似ている。指先が一瞬熱くなったのか、自分でも分からない。背中に流れる汗が冷たい。

もう一度、鉄の壁に触ろうとした刹那、扉——その取っ手は間近でなければ目立たないぐらい、壁と同化していた——がゆっくりと開いた。

「こらあ！」砲台の中から出てきた男が一括する。「何しとる！」若い男が躍り出てくるので、彼らは悲鳴を上げて一目散に走り出そうとした。

やはり、この時も春乃が太一郎よりも先に走っていると思いきや、そこらに密生している苔で足を滑らした。見事に頭から地面に激突した春乃は、何度かでんぐり返りしてから仰向けに倒れた。何が起きたのか理解してなさそうな呆けた顔が徐々に歪み、堪えぬまま盛大に泣き始めた。

泣きじゃくる声を見無視し、その場に立ち止まっていた太一郎は、姑息にもすぐさま逃げようとした。だが、数歩も進まないうちに、その襟元を男に掴まれてしまう。

「お前、逃げようとしたな？ 泣いてる女子を見捨てて、自分だけ逃げようなんぞ、男のする事か！」

青年はそう怒鳴ると、太一郎の頬を平手で殴った。

家族以外の者に叩かれるのは、何も初めてではなかった。最初何が起こったのか分からず呆然とした。しかし、遅れてきた痛覚に涙腺が込み上げてくる。普段なら我慢できるはずなのに、この時の太一郎はどうしようもなく耐える気が起きなかった。

滅多に見せないが、少年はさめざめと泣き出した。

「コラ、男が泣くんやない！ お前が悪いんやろが？」

愛国少年といえ、太一郎は子供である。男もまた、17歳の若者であった。青年に、雪崩の如く号泣する子供二人を落ち着かせるのには無理があった。

面倒くさそうに略帽を脱ぎ、彼は頭を掻く。「泣くなや……しゃあないな……じゃあ、これやるさかい」

青年は、懷から赤い缶を取り出した。太一郎は、ずっと年上の青年がそれを携帯しているとは想像もしていなかった。

今頃気づいたのだが、青年が着ているのは一般の国民服みたいだが、実は軍服だった。靴（編上靴というらしい）の上にはゲートルを巻き、襟に階級章を付けている。

その軍人は、サクマ式ドロップスの蓋を開けて逆さにして軽く数回叩いた。転がり出た色とりどりの飴のうち適当に二つをつまみ上げると、泣きべその止まない二人の口にそれぞれ放り入れた。

「これで堪忍しいや」

青年兵士は、先ほどと打って変わった優しい声で言う。

大の字になって泣いていた春乃は声を沈めると、「ミカンや！」と素っ頓狂な奇声を上げる。太一郎も泣きやんだものの、彼女と同じように有頂天にはなれなかった。口の中に充満する刺激臭は、あまり好きではないハツカであつた。

「さあ、早よ家帰り。ここは子供の来るトコちゃうで」

青年に連れられ、嫌々ながら二人は下山を強いられた。中腹の鉄条網の入口に着く間、軍服青年は春乃の質問攻めにあつた。負い目もある彼も邪険にはできない。

それにしても現金な奴だと、太一郎は幼馴染の少女に呆れながらも、その無遠慮な振る舞いに感心した。

「お兄さん、これ、かのおほおか？」止せばいいのに春乃は質問を続ける。「これで何か撃つんか？」

青年は手をブンブンと振る。「あかん、あかん。それはさすがに言われへんな」

「B29を撃ち落とすに決まってるやろ」つい調子に乗って、太一郎はそう言った。

「まあな……他の奴には内緒やぞ」

三人が立入禁止の鉄条網の前まで来た時、すでに太陽が沈んだ後だった。遠くで寺の鐘が数回響く。おそらく、門限の時間は軽く過ぎていゝだろう。

「ええか、もう一回言うが、ここの事は絶対に秘密やからな。誰にも言うたらあかんで。約束できるか？」

「はい」二人揃って、そう答えるしかない。

「ええ子達や。少国民はそうやないと」

軍服青年の顔は小さく微笑んだ。

三 長男

心ここにあらず。彼らは茫然自失のまま麓に下りた。

砲台の事は、誰に言わないように口止めされた。言い触らしたら憲兵に捕まるで、と得意満面の顔で脅された。

酒屋に帰っていく春乃を見送る際、太一郎からも彼女に釘を刺しておいた。

しかし太一郎の苦難はそこで終わらなかった。玄関に入った彼を、母と、彼女の背後から小さな笑みを浮かべる姉が待ち伏せていた。対抗心著しい兄弟姉妹の間では、片割れの失態ほど甘い蜜になる。太一郎は、姉の顔を恨めしく見つめた。

奥間に連れられて、命じられる前に正座をした彼は、母の妙子は門限が遅いと説教している間、頭の中は、砲台と新兵、壊れたブリキの人形みたいに泣き叫ぶ春乃、そして、口にまだ残るハッカの匂いで一杯だった。歯磨き粉に似た刺激臭で、殴られた口の中が余計にヒリヒリした。

これだから、ハッカは嫌いなのだ。

「太ちゃんは長男なんやから、しっかりせんと……」

「はい……でも今日は」

「言い訳は、男らしくないよ」ニヤニヤ笑いながら、巴が顔を出す。男勝りの姉を睨む。

「巴さん」母に諫められるのを見て勝ち誇っていると、「太ちゃん。よそ見をするんじゃないやありません」と静かだが厳しい声のお叱りが飛ぶ。

「……はい」

母の妙子に怒られたのは何年振りだろうか。太一郎は、何度も砲台の話を使い訳に出してしまいそうになる。

たとえ親でも秘密は守らないといけない。それに、お説教を聞かされているこんな情けない自分を知られたくない。壁に耳あり、障子に目あり。今のご時世、隣組のよしみで、いっどこで内緒が露呈するか分らない。

「太ちゃんも、この家の大黒柱やから、そろそろしっかりせんとね。」

いつ空襲で家がなくなるか分からんから」

再び戻ってきた姉はそう言って、太一郎の頭を撫でる。その手に噛みつこうとするが、難なく避けられる。

「巴さん、滅多な事言わんというて」

姉が謝りながらも言葉を続ける。「お父さんだって、太一郎の事を見守つとるから、何も心配する事はないよ」

太一郎は自分の立場が、父の死を境に少しずつ変わりつつあるのは知らないわけではなかった。神長家で長男にして男は、もう自分一人だけなのだ。近い将来、大黒柱になれば、二人の母と姉を養っていかなければならない。そんな事実から避けていたのかもしれないと思い、彼は自分を恥じた。

この家にはもう、男は自分しかいない。でも、その時には自分は兵隊となって、どこかの戦地にいるのだろうか。

大日本帝国は、戦争をしている真つ最中だ。そして自分は、その国に生れついた。今も数えきれないほどの若うどが戦地に向かっている。そこに至る過程を手繰り寄せ、彼の心に暗雲が覆う。少国民として生まれた子なら嫌でも分かる己の未来像を、心が明確な答えを出そうとする。

だが同じはずの心がなぜかそれを拒むのだ。そうだ、僕は護国の鬼となって敵を大勢殺し――最期には、散る。

「さあさあ、ご飯にしますよ」

母の呼び声で、思惟を中断した。それが救いに思えた。

夕食はいつもと同じ雑炊なのは慣れている。配給が滞りになり、玄米を最後に食べたのはいつの事だろうかと思いを巡らせば、余計に侘しくなるので止めた。

茶碗に収まるそれは、空襲の際の火災を防ぐために天井板が取り外され、屋根裏が露出しているのが映っていた。

これがホントの、天井雑炊だ。

「太ちゃん、今日、学校で転校生が来たって本当？」

母が所属している婦人会でもその話で持ちきりだという。

「うん、東京から越して来たって言っとった」

「珍しいね、こんな時期に」

本当に珍しいものの。どうしてやって来たんだろうな。向こうが大変だと言っていたのに。太一郎は苛立たしげに、沢庵を口に入れる。そうか、きっと逃げてきたに違いない。あの子ダメキなら十分ありえる。あれは、絶対にB29が来たら、速攻に敵前逃亡しそうな風体だ。

巴がふと思い出した事は、邪推に耽る太一郎を呼び戻した。

「そうや、お母さん。明後日やね、豆腐屋さんの雅夫さんが出征するんは」

「そうよ。早いもんやね。昔は太一郎ぐらいやったのに。あの子も戦地に行ってしまうなんて……」後の言葉が続かず、妙子は茶碗の上をじっと見つめていた。

仕方がない、とは当然だが誰も言えない。太一郎でさえそうだった。先程止まっていた自問自答が蘇る気配を感じ、彼は箸を無償に走らせた。来年の事を言うと、鬼が笑う。その先を言うなら、怒ってやって来るかもしれない。

次の朝も同じ日が続くのだ。そう思っていた太一郎だが、翌朝に催される出征式の日を境に、彼は少しずつ変わり始めるのを避けられなくなる。

変容しつつある少年は米の少ない雑炊を食しながら、ボンヤリとラジオから流れる戦況報告に耳を傾けた。

この日もまた、やたら“転進”が多かった。

四 出征式

早朝、豆腐屋の長男雅夫の出征式は、学校の通学路にある朝日商店街の広場にて執り行われた。

彼の顔を知る太一郎や毅、恭平、春乃らも式の参加を義務付けられている。午前八時に集まった大人達や他の子供に混じり、予め配

布されていた手旗を手にとっていた。

彼らの家族や商店街の店主らは、祝辞の進行を務める在郷軍人の齋藤老人に、若い頃の日露戦争での活躍に耳を傾けている。その中には、しつこいほど頷く者もいれば、時間帯のせいか話が冗長なせないのか、必死に欠伸を押し殺す者もいた。

飯野豆腐店の店先に立て掛けられたには、『一撃必殺』、『七生報国』、『特攻神念』など、中には太一郎が読めない字もたくさん描かれている。そして大人達は皆、一様に白いタスキを肩に掛け、その顔はどれも無表情に近かった。

前準備は長かったが、いざ定刻通り始まった出征式は、何事もなく淡々と厳かに進行した。始まってから一五分後には、式は佳境に入ってた。

ただ、今日まで豆腐屋を雅夫と共に切り盛りしてきた彼の母親だけがうつむいたまま、終始無言だった。近年、腰が曲がり老境著しかったが、今はもう魂をどこかへ置いてきたように微動だにしない。雅夫に肩を抱かれて、その場に立っているのがやつとである。その間、自分の両手を握手するように強く握りしめ、これから戦地に向かう息子を一瞥もしない。

「それでは、本日、出征される事となりました飯野雅夫の前途を祝して――」老人は一度息を大きく吸い、「万歳！」

そして、他の全員がそれに倣って万歳三唱する。

日の丸が模られ、十字になったタスキを肩に掛けている雅夫は、その表情は硬くして家族や知り合いを見つめて石像のように直立しているだけであった。

太一郎が知っている彼とは何かが違っていた。以前は、少し内気だが面倒見がよく優しい人だった。太一郎の中にあった、兄貴分の彼と目の前で出征を祝されているのとは別人のようだった。

狭い店の前で、ギョウギョウになりながら集合写真を終えた。雅夫が全員に向かって深い礼をする。

「皆さん。本日はお忙しい時間を割いて頂き、本当にありがとうございます」

ございました。僕は、今日より帝国軍人として選ばれた誇りを胸に旅立ちます。母を、飯野豆腐店をこれからよろしくお願いします」拍手と共に、誰かの失笑が太一郎の耳元に入った。雅夫自身も微かにはに candaga、すぐにその唇と一門字に閉じる。

老いた母の息子に歩み寄る。既に二人の子を送り出した未亡人には生気を抜け、一本の杖に支えられたような、その足元もおぼつかない。

「雅夫……」

「お母ちゃん。体に気をつけてな」

「あんただけでも……生きて、帰り……」

消え入りそうな母親の一言に、雅夫は戸惑う。

小さなざわめきが起きた。耳聡い齋藤老人の白く濁りかけた双眸が、二人を冷たく睨みつける。さっきまでの賞賛が嘘のように、胡散臭い余所者を見つめているようだ。

「それを言ったらあかんよ。お母ちゃん、頼むから……」

雅夫は、母親の痩せ細った肩に手を置いた。そして、まるで鉄仮面のように固く引き締まった顔を群衆に向ける。

「では、行って参ります」

式が終わり、駅に向かう雅夫を全員が万歳をして見送った。

母親を残し、無言で改札の奥へと消えていく背中に、太一郎は将来の自分を重ね合わせようとした。しかし、昨日と同じく浮かんでくるものは何もなかった。あまりにも知らない事が多過ぎて漠然としている。

式の後、飯野豆腐屋の壁に青い札が一枚掛けられた。

青い札には日の丸の下に『出征軍人』と書かれて、それがあある家は、最低一人は兵隊を輩出した事を示しており、一種の名誉とされている。

どちらも長男の兄が出征した、春乃の酒屋や穀の家にもある。しかし、たった一人の長男が太一郎である神長家にはまだなく、彼は――母の妙子や姉の巴はどう思っているのかは窺えないが――少し

肩身の狭い思いを隠せなかった。

「ともあれ、これで豆腐屋のボンも、晴れて“はぐれもん”言われずに済みますな」

帰る一団の中で、団扇を仰ぎながら町内会長が言う。それを聞いた一人が頷き、「そうですね。若い男で内地におるもんは、恥ずかしゅうて、とても外歩かれませんわ」

大人達の会話が前方に流れ去ってからも、太一郎の足は止まったままだった。通りの中で、唯一、出征の札が掛かっている我が家の門前をなぜか思い出す。

自分の元に赤紙が届く頃、戦争はどうなっているのだろうか。今年の三月には鬼畜米英は沖繩に上陸し、本土決戦もそう遠い未来ではないと新聞に載っていた。

太一郎はもう一度、将来の軍服に身を包んだ青年と同化しようとした。普段から思い描いていた愛国少年の将来像に、自分の顔を貼り付けて幻視しようとした。

結果は変わらなかった。そこにあるのは、隅渡るように真っ白な空白だった。その中心に、一人だけでいる光景に、太一郎は図らず背中を粟立たせた。そして、思わず太陽を見上げ、その眩しさに目を伏せた。

太ちゃんは長男なんだから。母の言葉を思い出し、家の方角を向ける。その後ろに聳える小さな山のちょうど砲台があるであろう頂上付近に目を凝らす。

抗いようのない決意が、そこに導いているようだった。

五 太一郎の決意

式典が終わってから正午頃、いても立っても居られなくない思いでいた太一郎は、裏山の砲台へ急いで向かった。昨日と同じ鉄条網と挟れた地面との隙間を這い、急な斜面を駆け上る。記憶を手繰り寄せながら、無心に頂上へと急いだ。

最近では梅雨が始まり天候が不安定なせいもあってか、樹木から降り注ぐ光はやけに弱々しい。そのせいか、昼間だというのにいように妙に暗く感じる。

砲台の前に出た時、あの青年が腰を下ろしていた岩場の背後に太一郎が現れた。ちょうど昼飯時だったらしく、うまそうに握り飯を頬張っている。その光景を羨ましそうに見つめる少年が目に入った途端、彼は喉が詰まったのか勢いよくむせた。

太一郎は急いで駆け寄り、家から持って来た水筒の蓋を開けて渡した。死に物狂いで水を飲み干した青年は消え入るような声で、「おおきに……」と感謝した。

しかし次の瞬間には太一郎の胸倉を掴んでいた。太い眉の顔が間直に迫り、少年は目を丸くした。頬がこけているが、鬼瓦のようにおっかない顔をしている。

「何で、また来たんや！ もう来るなって言うたやろ！」

そして思っていた通り、昨日のように頬を平手で張られた。あらかじめ覚悟して身構えていたため、前回みたいに脳裏に星屑が飛びはしても泣きはしなかった。

「早よ帰れ！」

「嫌です！」青年の怒鳴る声に、頑として拒む。

その後、二人は少しの間、取っ組み合いをした。大人と子供では勝敗など明白だが、どちらもなかなか引き下がろうとはしなかった。太一郎は何度も掴み上げられて、突き飛ばされたが、それもしつこく食い下がり続けた。

ついに根負けしたのか、青年兵士は地面に腰を下ろした。双方とも顔や服にコケや泥がついている。荒い呼吸だけが静寂な砲台に流れた。

「……何でまた来たんや？」

少年の望みは決まっていたので、口から出た言葉に淀みはなかった。

「ここで雇って下さい」

「は？」青年は、素っ頓狂な声を出す。

「見張りでもなんでもいいです。僕を兵隊にして下さい」

「何、言うとなんや、お前？」

太一郎は青年兵士に出征式で思った事、自分の家だけ兵隊が出ていない不安を具に語った。最初は、門前払いか、茶化されるのかと思っていた。だが、彼は意外にも口を挟まずに、太一郎の話を腕組みして静かに聞いていた。

話を聞き終えてから、彼は静かに口を開いた。

「気持ちとは分らないでもないけど、お前にはまだ早いな。あと数年待たんと」

「せめて、留守番でもいいからお願いです」

青年は押し黙り、再び腕を組みながら何かを考え始めた。それが終わるのも早いので、少年は何も期待していなかったが、次の一言は思ってもみなかった。

「お前、名前なんていう？」と出し抜けただったので、何も考えていなかった太一郎は「え？」としか言えなかった。

「“え”が名前か？」と決め付けられそうなので、「違うよ」と慌てて訂正した。

「神長太一郎です！」

「ほお、太一郎って言うんか。ええ名に、ええ声をしとるな。因みに、俺の名は佐川春照や。これでも一等兵なんやで」

「それって偉いの？」

「偉いのですか、や。兵隊になりたいんやったら、口の利き方にも注意せんと、拳骨が飛んでくんで。まあなあ、下の中といった所やな」

それが偉いのかどうかは太一郎には分からなかったが、襟首の赤い階級章には黄色い星が二つ付いている。以前見た兵隊は星が一つだけだったから、その人よりは少し上なのだろう。どちらにせよ、これから自分の上官になるのだ。

「お前に、ここの見張り番、そうやな……砲台守になってもらおか」

「砲台守？」

「海の灯台知っとるな。あの灯台守とかけたんや」

砲台の見張りをする砲台守の役目。うん、それならいいだろうな。太一郎の返事は決まった。空を覆う雲が一気に晴れたように、光が注いだ。

「ところで、お前ら兄妹か？　いつも一緒におるな」

「お前ら？」

晴照が彼の後ろを指す。振り返った太一郎は、すぐ背後に立つ春乃の顔が視界に一杯に入る。悲鳴を漏らして腰を抜かした拍子に、地面の苔に足を滑らして転倒した。

「お前の妹は、忍者かいな」

呆れつつも、青年兵士は笑いを小さく漏らした。

「妹じゃありません……」太一郎は力なく、そう言った。

こんなのが、家族にいたらかわなん。とても神経が持たない。

画用紙とクレヨンの箱を持った春乃はおかしく大笑いしていた。

尻餅をついていた太一郎も、訳が分からず笑いだした。

こうして、砲台と彼らは出会ったのである。

世の中は流れていく。人の想いもまた変わる。

そして未来も変わり、そのまま流れていく。

《次回へつづく》

第三回　それで、彼らは出会った（後書き）

第四回となる次回の投稿は、9月を飛んで、再来月の10月7日（金）の午後9時になります。

＊9月2日（金）午後九時頃に、短編作品『タケルの悪夢』を投稿します。

第四回 砲台守の日々

一 二人は砲台守

太一郎は、自分でも信じられないほど速く走っていた。

もしも、目の前に壁があっても、彼には立ち止まらずに正面から激突してしまうに違いない。それぐらい、馬車馬のごとく突っ切っていたのだ。

もっとも、その行為が何日も続いて習慣になれば、その時間に差し掛かった頃合いになると、“神長とこの坊主が走って来るぞ”と誰かが告げて報せるようになった。その一声を聞いた人達が、蜘蛛の子を散らすように一斉に道の両端に寄る。

おかげさまで、今のところ怪我人は出ていない。しかし、彼が通過した後も住人達は安心できない理由があった。

少年が通過して間髪入れないうちに、月影酒屋の娘が韋駄天走りで駆けていく。それは太一郎とは比べようのない神速で、彼らが行って、やっと商店主や主婦達は安堵して井戸端会議や配給切符による少ない買い物を再開できるのである。

彼らが走り去った後の大道には、土煙が舞い、幾人かが数回咳込んだ。

あの出征式の後、砲台山で少年少女と青年兵士の間で交わされた約束から数日間が経った。あの日以降、学校から帰った太一郎は毎日欠かさずそこに通っていた。

当然、誰にも内緒なので忍者のごとく隠れながら砲台山へ向かうとするのだが、必ず春乃に背後を取られてしまう。知恵遅れでも足の速さでは完全に負ける。

女子のくせに。太一郎は毒づいたが、競争に叶わないのは事実である。ここに悪態をついても、男らしくない。だからと言って、こ

のまま女子に負けたままでは男児の名が廢る。おまけに最近では、やけに口の方も達者になったようだ。

「ついて来んなや」と太一郎が言うならば、春乃が「なぜじゃ？」の押し問答。

「お前は女やろ」

「太ちゃんは、この前、わしを女には見えんと言うとった」

「あれは……嘘や」

「男に二言はないって、時々父ちゃんが言うとりよ。男の人は嘘をつけんのじゃろ？」

嘘をつけないわけではないのだが。しかし、このまま説明しても面倒くさい、と太一郎はあっさりと折れた。

それにこいつは煙に巻こうが、隠れようが同じだ。必ず目的地の砲台にいるのだから、どうにも誤魔化しようがない。

太一郎は、幼馴染の意外な小賢しさに呆れ果て、最後には折れた。いっその事、伊賀か甲賀にでも行けばいいのに。

ともあれ、仕方なく二人で砲台の見張りに立つようになった。とは言っても、見張る以外に何もする事がない。当たり前なのだが、山の中腹には（太一郎達が行き来している抜け道を知っているなら別だが）一周して例の鉄条網が張り巡らされている。部外者どころか獣だって姿を見せない。

二人が期待するところの、鬼畜米英やその手先であるスパイの侵入など、夢物語に過ぎなかった。それでも、太一郎がその事実気づくまで数日かかった。

彼は、そこで何かが起きるのを強く期待していた。

「そんなん、おらんおらん。大体、砲台はここを入れていくつも置かれてんねんで。なんでここだけ狙わるっちゃうんや」

盗まれて困る物もないし、こんなデカい大砲、さすがに盗まれへんやろ。

高笑いを上げる清照だが、子供は気紛れだから、どうせいつかいなくなるだろうという腹積もりは見事に外れた。二人の熱心さには

褒めるべきか呆れるべきか。

遊ぶ時間をただ待っているだけで費やすのも栓はない。すぐに各々に持物を持参し、時間を潰すようになった。太一郎は学校の宿題や雑誌『少國民の友』や『少年倶楽部』を持参し、春乃は画用紙とクレヨンを脇に抱えてくるようになった。

彼女はずっと彼の真横に座ると微動だにしないまま、門限が近づくまで少年の顔を描いている。どうせ知恵遅れの描いた絵など、落書きだろうと内心馬鹿にしていた。その勢いである日、お互いの顔を描いて競う事となった。

勝利を確信していた太一郎だったが、完成した相手の絵を見て、屈辱どころか度肝を抜いた。クレヨンで描いたために荒い感じにはなっているが、春乃のそれは、まるで鏡に映る自分を見ているかのようなほどの精巧な出来だった。

お世辞にも、大きな目をした案山子のような顔を描いた太一郎のそれとは比較にならない。口をニンマリと広げ、大きな目を輝かせたシタリ顔をこちらに向けてくる。太一郎は、心の底で地団太踏んだ。

陰湿な屈辱はなかった。代わりに沸いてきたのは、まったく別の感情だった。

「春乃。お前、本当に画家なれるんとかうんか」

少女は無関心に首を振り、「うちは酒屋を継ぐんじゃ」

画用紙を裏返しにして次は砲台を描き始めた横顔は、本当に真剣そのものである。太一郎はいっしょにその顔を見つめた。

この間は、画家になると言っていなかったか？

「酒屋を継ぐって、ハルは酒飲めるんか？」

酒屋をやっている人はみんな酒飲みだと、太一郎は思っている。しかし、耳栓でもしているのか、少女の顔は石像のように固まって画用紙を凝視している。その手は休むの知らない機械のように、周りの風景を、草木や岩肌、そこに鎮座する砲台を巧みに描き上げていく。

太一郎はふと、これはスパイ活動には当たらないのかと思い当たった。確かに、目の前で幼馴染が描く絵は、信じられないほど緻密である。もしもこの絵が敵の目に入れば、砲台守の面目丸つぶれである。その危機の芽を摘む為にも、こいつから絵を取り上げないといけない。以前ならそう考えていただろう。

だが、そんな馬鹿馬鹿しいし、野暮だろう。そう思ってしまうほど、春乃の顔に見とれていた。そこにはいつも毅達にイジメられて、貝になって怯える少女とはどこか違う、別の誰かのようなだった。嫌、そうじゃないかもしれない。これが本当の春乃なんだ。太一郎にはなぜか、それが嬉しくてたまらなかった。

理由は知らない。それでも悪くはない。

見つめている間が長かったせいか、怪訝な顔で少女は太一郎の方に向いた。少年は、言葉に詰まり、さっと顔を地面に向けたまま何も言わなかった。

二 はずれもん

砲台にいる兵隊は、何も清照ばかりではない。

ある日、砲台にやって来た太一郎達は、清照ではない小男の青年と偶然鉢合わせてしまった。二人が目に入った途端、兵士の顔が紅潮した。

「お前ら、何をしている！」

清照よりも若い兵士は怒声が裏返える。見方によっては、中等部の学生と間違えられるかもしれない顔立ちをしている。

太一郎が事情を話す前に、清照と初めて会った時と同じ憂き目に遭った。つまり、二人の脳天に、揃って渾身の拳骨を見舞われたのだ。

いかなる状況でも経験がモノを言う。鉄拳制裁が珍しくない習慣に加えて、清照に二度も殴られた経験を持つ彼は、何とか涙は堪える事ができた。

春乃は、相変わらず泣き喚きながら無茶苦茶に暴れた。

砲台に清照がいなかったら、収拾がつかなかったであろう。例のドロップを取り出して、彼女の口に放り込んで鎮めた。

「アホ！ 子供はな、殴ったら余計に粗相を起こすんや。優しく言うのが常道やから、覚えとけ」

彼が得意げに説教する間、太一郎は笑いを必死に押し殺した。

新しく現れた兵隊の名は、長谷部豊道という。階級は二等兵で、入営してまだ日が浅い。清照曰く、自分の直属に当たるとただ一人の部下らしい。毬栗頭に小さな顔はどこか愛嬌がある。瘦身の清照に比べると、小柄で中学生と変わらない。

しかし、清照よりも融通の利かない頑固な性格をしている。最初、砲台守の役目に付いた太一郎達を懸念していた。いつか聞いた事のある軍人特有の機械的な口調で、彼らがここにいる事が悪い意味を持っていると滔々と“上官”に説得していた。

豊道は彼よりも意外と背が高いので、上下関係と体格の不一致がどこかおかしく見えた。他の者からしたら、どちらが上官か部下なのか分からないかもしれない。

その部下は、口のうまい清照の説得でもなかなか譲らなかった。

「しかし、ここは陸軍の重要拠点なのですよ」

頭を掻きながら、「ああ、お前はなんで、そう融通がきかんのや。もう少し、脳みそ丸くせんとあかんで」

「しかしですね——」

「ちよう待て」清照が先を制し、太一郎に向き直ると、その耳元で何かを囁いた。

太一郎は何度か頷くと、急に二等兵の前に立った。

「な、なんだよ」と構える豊美知には少し動揺が見られた。自分と同じく、予想外の逆境には弱いかもしれないと、太一郎は思った。彼は大きく息を吸い、腹を膨らませる。そして、耳も劈くほどの啖呵を切った。

「僕は将来、あなた達の後続く帝国軍人になる少国民なんやぞ！」

後ろでひつと声を上げて、春乃が再び泣き出しそうな兆しがあったので、声を下げて、「だからお願いです。僕を――」と言ったところで少女を見つつ向き直り、「僕達もここにいるのを許可してください。お願いです粗相はしません」

「まっこういうこっちゃ」

同僚の肩を叩き、清照は少年の頭を撫でた。

「……知りませんよ、曹長殿にばれても」

すっかり意気消沈してしまった豊道二等兵は、太一郎をじろりと睨んだ。だが、清照よりも迫力は劣るようだ。

「大丈夫、大丈夫。あんな堅物の仏像はあまりここへは来ないさかい、見つからへんやろ。それに、この坊のお父はもう死んでもうたけどな、なんでも特高だったらしいで。だから心配はあらへんわ」
「特攻隊だったのですか？」

「ドアホ。特別高等警察の方や」

そんなこんなで、豊道も二人の砲台守の仕事を黙認してくれようになるまで時間はかからなかった。父親の地位がこんな時も役立つとは思わなかった。

ともあれ――二人の兵卒以下の人材は、砲台守の仕事を取られず砲台に通ううちに、彼らの他にも何人か兵士がいると分かった。一番格上だった清照の説得もあってか、出くわした分だけその人数の拳骨をされずに済んだ。

「あいつらは皆、お前らぐらいの兄弟がおるからな、邪険にできへんのや。よそからやって来たのはそもそも俺らやしな」

「どうして、兵隊さん達は町に下りてこんのじゃ」

スケッチをしていた春乃は手を止めて言った。

「俺らはある意味はずれ者なんや」

「はずれもん？」

兵隊さんにも当たりや外れがあるとは思わなかった。

清照は目を瞑りながら、「兵隊はな、皆が前線で戦ってるわけやない。特に、アメリカのB29が空から爆弾落とすようになった頃

から、俺らみたい内地、御国で戦うもんも必要やねん」

太一郎は数日前にあった深夜の警報を思い出していた。初めてこの砲台を見つけた時、それが勝手に動いてB29どもを蹴散らしてくれたのばかり思っていた。それは漫画だけのものだったのだ。

「おかげで、俺らは就任先の住民からは白い目で見られとる。あくまで勘違いかもしれへんけど……」

初めて彼の溜め息を見て、太一郎はどこかで見たような光景だと目をパチクリさせた。それがどこなのかは思い出せない。

「どうしてなの？ 清照達は立派な兵隊さんなのに」

「まあな……あちらさんには、あちらさんの事情があるんやろうな」事情なんてあるわけがない。こんな大きな大砲を動かして、鬼畜米英から自分達を助けてくれる人達を、白い目で見られるわけがないのに。

そんなの、天皇陛下への無礼と同じだ。太一郎は握り拳で、地面を叩きたい衝動に駆られた。そんな連中なんて非国民の何者でもないじゃないか。

「それに比べれば、野良仕事みたいな任務でも、この山奥の方が気分も晴れていいわ」

「清照兄……」

「なんや？」

「僕も兄ちゃんみたいな立派な兵隊になるから。誰にも非国民なんて言わせないようにしてあげる」

少年を見つめる青年兵士は、その目に憂いを秘めつつ、小さく笑った。

「こいつ。一丁前になりおって」清照の手が坊主頭をくしゃくしゃに撫でまわす。

二人のやり取りを、少女は真剣な目で交互に動かしながら、スケッチに色鉛筆を走らせていた。その口元は、水の中にもぐったように固く閉じられていたが、大きな目はこの上なく光を宿す。

夕刻を知らせる日暮らしが、小うるさく啼いていた。

三 灰色の嘘

母から聞いた話によると、嘘には二種類あるらしい。

その人が自分の失敗や悪い事を隠すためにつく、真っ赤な嘘。その人が誰かの親切を思っただけでつく、真っ白な嘘。

どちらにしても、嘘をつかないのが一番良い。妙子は話をそう締めくくった。そこで、太一郎はふと考えた。

自分達のしている嘘は、はたして何色だろうか？

季節も五月の末に差しかかり、初夏へと続く梅雨時にあった頃、夜間警報の頻度が増える共に、相変わらず太一郎の砲台山通いは続いていた。春乃も同様で、午前中まで店の手伝いをして、午後になるとふらっと消えてここへやって来るのだ。

重要な仕事も与えていない少女の両親も、小うるさい厄介者がいないと安心するのか、それと咎めようとしなくなった。

無論、そんな習慣が続けば怪しむ者も出てくる。最初に言い出したのは、母の妙子と姉の巴だった。

「最近、帰りが遅いけど、どうしたん？」

学校で明日の分を勉強している。河原で草野球や戦争ゴッコをしていて長引いた。そう言って、彼はなんとか誤魔化した。いつかは指摘されると心積もりしていただけに、太一郎の作り話は淀みなく、神長家の女性陣は疑う素振りもなかった。

では、朋輩に対してはどう言い繕うか？

時々、イジメていた春乃も同じ時間にいなくなるのだ。毅が他の連中と一緒に、邪推する内容も月並みだった。

「お前ら、何かやらしい事しとるんか？」

普段は歯牙にもかけていなかったはずなのに、こういう不自然には敏感だ。もっとも、これもあらかじめ考えておいた嘘で切り抜けた。

太一郎が酒屋の酒を割ってしまい、お詫びに手伝いをさせられて

いる。春乃の両親に聞かれたら、すぐに嘘だとばれてしまうだろう。そんな杜撰な話でも、彼らはすんなりと引き下がってくれた。貴一とつるむようになって久しく、以前の箔がなくなり、愛国少年としての価値が貴一よりも劣る太一郎は不要なのだ。そんな奴が今さら何をしていようと知った事ではない。

太一郎はそう判断し、自ら、昔日の厚遇を諦念していた。最初からなかった物が勝手に出て来て、元通りに土へ勝手に還っていったと思えばいい。

最近の毅達は、こんなご時世だというのに、貴一の執事が運転する車に乗せて学校へ行っていると風の噂で聞いた。二人が朝早くに学校を通り越して、わざわざ半田邸まで出向いてお出迎えをし、貴一はいつも車で送迎されて登校している点から、ほぼ間違いないだろう。まったくもって、太一郎には訳が分からなかった。

学校でも、ろくに話す機会も減った。元々、内気な性格である太一郎が話をするのは、相手の方から尋ねてくる場合のみの一方通行であった。今の彼に、毅も他の友達は関心なく、貴一の机の周りに集まっていた。

話は逸れるが――例外として、宿題をサボって学校に来る山田耕介（歯抜けが特徴）だけが、相変わらず太一郎に“救い”を乞うてくる。誰かを彷彿とさせる顔を机の上に乗せ、いつものようにノートを見せてほしいと頼む。

「僕なんかより、半田君に見せてもらったらええやん」

「神長君の方が、頼みやすいんや。せやから、お願いします」

こちらはお釈迦様でもなんでもないのに、手を合わせて拝んでくる。辟易しつつ、彼は宿題を書いたノートを広げる。

「半田君が嫌いなんか？」

耕介は大袈裟に首を横に振り、「嫌いなないんやけど……」

言い淀む耕介に痺れをきかし、太一郎は小声で詰問する。その返答に、汗が一気に干上がる気分になった。

「なんかなあ……怖い」

「半田君の目がか？」自分でも感じた印象をぶつけてみた。

何も言わず淡々とノートに答えだけを写しながら、耕介は一回だけ首肯した。

話は戻り——愛想を尽かしたのは、まさにお互い様である。

むしろ、山の砲台について詮索されなくなかったので、こちらとしては逆に好都合であった。半田様じゃあ。以前自分に言ったように（もうすっかり忘れているだろうが）、貴一に媚びへつらう級達の声聞き流しながら、太一郎はそう思った。

むしろ、説得に難儀したのは春乃の方だった。当初、嘘をつくの
に反対したのだ。

「太ちゃん、嘘はあかんよ」

「いいんや、これは嘘で」

嘘をつくと閻魔様に舌を切られる、と春乃は言った。さすがの太一郎も背中に悪寒を走らせた。別段誰にも迷惑など掛かっていないと思っ
てはいても、小さい頃から聞かされた迷信は、なぜか聞く度に耳が痛くなる。

——こいつを見ると、なぜか、誰かを思い出す。

「じゃあ、お前も共犯やぞ。ハルも舌を切られるで」

そう告げてやると、さすがに黙り込んだ。そうだ、誰だって地獄は怖い。そう悦に入る太一郎も、直後に号泣する少女を泣きやま
さなければいけない羽目になる。

自分達がついている嘘で、誰かが迷惑を感じたり、誰かが損得を
したりしたわけでもない。同じ嘘でも人畜無害だが、誰かの駅にな
るわけでもない。真っ赤な嘘でも、真っ白な嘘でもない。間違っ
てはいないし、正しくもない。灰色の嘘。

だが、嘘は長く持たない。内容が杜撰で矛盾もあれば、無効にな
るのも早い。

またまた話は逸れるが——息子と一緒に向かいの娘までいなくな
るという情報をどこで聞きつけたのか、母と姉の追及も厳しさを増
していた。女の勘は恐ろしく鋭いと、幼い時から感じていたが、満

更でもない。もう少しで露見しようになったほどだ。

ある日曜日の昼、砲台山へ行こうとする太一郎を母が呼び止めた。
「太ちゃん。ハルちゃんと裏山に毎日通つとるそうね」

「違うわい！」

しかし、近所の人達の証言をつきつけられて、さすがの太一郎も言葉に詰まった。

「何をして遊んどるの？」

彼が何も言わずにいると、珍しく家にいた――また工場が空襲で半壊してしまつたらしく、自宅待機を指示されている――巴が顔を出してきた。男みたいに短髪で、気が強そうな姉は、太一郎にとって天敵だった。

江戸川乱歩の明智小五郎のように顎に手を乗せて、「ははん、なるほど」と言いながら、こっそり妙子に耳打ちする。

娘の推理を聞いた彼女が途端、「ええっ！」と素っ頓狂な声を上げ、慌てて口に手をやった。さすがの姉も、況や太一郎本人も、鳩が豆鉄砲を喰らつたみたいな顔で母を見つめた。よほど驚いたのだろう。はたして、どんなホラを吹き込んだのか。

「太ちゃん」薄気味悪い猫なで声で巴は言い、弟の坊主頭をグリグリした。

「お前さんもやるなあ」

「何が？」

「ハルちゃんと何したん？」

「何をつて……何の事や？」

太一郎は、自分でも何を喋っているのか分からなかった。

姉は太一郎の耳元に、分かりやすく一文字ずつ囁いた。「

姉ちゃん、接吻ってなんや？」

弟に呆れたように巴は肩をすくめて、母に言った。

「お母ちゃん、この子絶対にカマトトぶつとる」

「巴さん。はしたない事を言わない」

姉の勘は正しい。太一郎は、接吻の意味を知っている。どこで知

ったのかは彼自身も覚えていない。難しい言葉の知識というのは、いつどこで知り得たのか分からないのが常である。気づいたら『知識』と書かれた頭の棚に、その意味と共に収まっている。

「あ、太ちゃん、顔が赤いよ。やっぱり——」

巴の先を制して、「行ってきました」と太一郎は足早に玄関へ走り出た。後を追いかけるように、妙子が息子の背中に呼びかけた。

「太ちゃん。お母さんは許さんよ」

だから、そんなやらしい事なんてしていない。だか、砲台の話など出来ない。

母は言葉が続けた。

「接吻は、誰もおん所でんさいよ」

通りの真ん中に走り出た時、太一郎は足を絡ませ、ものの見事に転倒した。後ろから、姉が甲高い爆笑を上げる。

砲台山に着くと、いつも通り岩の上に座る春乃がいた。赤面する彼は声高に宣言する。

「ええか！ おめえとは絶対に御免やからな！」

「太ちゃん。お猿みたいに顔が真っ赤じゃ」

少女は盛大に笑いだした。

話の軌道は再び戻り——少女が砲台守の任に就いてから、一週間が過ぎた。

四 訓練と夕暮れ

この日はいつもとは違う、という風にしてもらった。

砲台の前に揃って立つ少女の顔は、これ以上とないほど緊張して固まっていた。正確には、仏頂面になっているのは太一郎だけであつた。春乃の方かというと、何が始まるのか分かっておらず、口をポカンと開けて呆然としている。

二人は、そこで落ちている木の枝を拾い、“警棒”代わりに携えていた。

生い茂る草を分け入るようにして、一人の男が現れた。

相手は覆面で顔を隠しているが、見覚えのある服装しているので、誰なのかは一目瞭然である。しかし一応“訓練”なのだから、そんな瑣末は太一郎にはどうでもよかった。

春乃が何かを言いかけた口を、少年は手で塞いだ。

目の前に突如現れた覆面男は、立ち入り禁止区域に侵入してきた不届き者、という“設定”なのだ。

「おお、なんやここは？」

ズカズカ入って来るなり、覆面男が言う。どことなく投げやり感の漂う棒読みになっているでもない。それは、太一郎の気のせいとは限らないだろう。

木の棒を手にした太一郎は前に進み出ると、震える声で「止まれ！　ここは大日本帝国陸軍の、作戦区域——」

「うらあ、そんなん知るかい！」覆面の恫喝が、停止命令をかき消した。

春乃が「ひい」と声を上げる。

事前に取り決めていた手順とはいえ、いきなり大声で出して本気になる事はないだろ。太一郎も負けじと、警告を続ける。

「お前は、陸軍の作戦区域を侵犯している。早く立ち去れ」

「いややな。そんなん知らんがな」覆面男の物言いが横柄に変わる。次の手順に移ろうとした途端、太一郎の背後で突如、金切り声が上がった。木の棒を振り上げた春乃が、覆面の闖入者に向かって突っ込んでいったのだ。

「馬鹿！　まだ早い」と止める間もなく、覆面の侵入者は彼女の袋叩きになる。子供さながらの手加減の無さに、さすがの覆面男もタジタジである。

「参った！　参った！　降参や」

覆面が諸手を上げて、顔の頭巾を剥ぎ取った。見慣れた顔を見て、泣き叫ぶ春乃は一旦静止した。「清にい……どうして、そんな恰好をしていたんじゃ？」

「訓練するって言いだしたんは、お前らやろ……イタタタ」そう言う
うと、さっき春乃に叩かれた箇所を抑えた。

太一郎は呆れて声も出ない。数分前にも、砲台守の訓練があると
説明しておいたはずなのに。やはり一人でやった方がよかったかも
しれないと後悔した。

「心配せんでも、ここに侵入者なんて来ないと思うで」

「そんなの分からんよ」

二人のやり取りを事細かにスケッチしている春乃をよそに、太一
郎は天高く伸びる砲身を眺める。一度でもいいから、砲台を見てみ
たいという願望で一杯だった。

前回、ダメ元で頼んだが、やはり駄目と言われた。それに自分は
あくまで砲台の見張り番であって、それを実際に操縦するのにはま
だまだ半人前だと言われていた。

「じゃあ、僕はいつ一人前になれるの？」

「そやな……あと5、6年は待つんやな。その時にはおれも土管に
でも上がって、みっちり叩き込んだるからな」そう言って、頭をく
しゃくしゃにする。

「うちはなれんのか？」画用紙にクレヨンを走らせながら、春乃が
言う。「馬鹿。女は軍人にはなれないんやで」

「そうか」少し残念そうだったが、こればかりは仕方ない。

「嫌、分からへんで。お前らが大人になってる時は、女も兵隊にな
れるかもしれへんぞ」

「本当！」春乃の眼が輝く。砲弾を取り落として、ヘマをしでかす
未来の少女を夢想し、太一郎は苦笑する。

「まあ……将来そんな風にならんように、今の俺らが頑張らないか
んのやけどな」

「清兄らが？」

「俺ら兵隊は、家族や国民を守るのが仕事や。お前ら女子供が戦わ
んで済むようにせんとあかん。そやから、もしも、流れ弾に当たる
ような間拔けな死に方をして、誰一人傷一つ負わんず死なずの無

傷で終わったら、俺らの勝ちや」

清照の言葉と顔を、この時の太一郎は忘れなかった。いつも兄貴分であるはずの彼がまるで別人に見えたのだ。

もしかしたらこれもまた、本当の清照かもしれない。春乃の時もそうだったように。

太一郎は自問した。本当の自分がいるとしたら、そいつは一体どんな顔をして、どんな言葉を持つのだろう……。じゃあ、今、ここにいるのは一体誰？

葉の隙間から差しこむ、夕焼けが三人の横顔を照らす。それを一瞥しては、少女はクレヨンを持つ手を走らせていた。

五 嫌な約束してしまった

太一郎は後悔した。嫌いな相手と、嫌な約束を交わしてしまったのだ。

事の発端は、相手の不敵な挨拶から始まった。

「おはよう」

その日の四時間目の授業が終わり、一息をついていた太一郎は、背後からいきなりそう声をかけられた。反射的に振り向こうとして、聞き覚えのある声といい、後ろの席には誰がいるのかを思い出した時には、不本意ながら相手の顔と対面していた。

時すでに遅しとはいえ、太一郎少年は後悔した。これが一度目の失敗である。

半田貴一が机から身を乗り出している。隣の奴は席を立っている。で、貴一の重さで机全体が前に傾きかけている。本人が気づく前に、小さく突き出た腹に支えられたまま、貴一が机もろとも床に前倒れするのを、太一郎は密かに期待した。

「おはよう。僕に何か用か？」

「君が神長君？ お父さん、特高の人だったんだろ」

彼の挨拶を無視するかのように、貴一は言葉が続ける。太一郎は

舌打ちをしたいのを我慢した。相手がそれをできても、自分にはできないのを知っているからだ。自分だけじゃない。今、この教室の誰もが、目の前の秀才を軽視するのは許されないのだ。

東京から来た金持ちの半田貴一は、もはや転校生——よそ者ではないのである。

数カ月分の配給切符に相当するであろう、高級な学生服さえ着ていなければ、駄菓子屋の前で飴玉をペロペロ啜えて、後ろ足で直立歩行をする豚だが……。

「何でその事を知っとるん？」

「聞いたからに決まっているだろ。初めから、何でも知ってる人間なんていないよ」

教え子を諭す教師みたいな口調に、ほんの刹那、太一郎は眉を寄せた。どうして、こいつはいつも居丈高なんだ。普通に喋れよ。

貴一に自分の父の事を教えたのは、はたして誰か？ 当然のように、教室の隅にいる本人と目が合ってしまった。太一郎少年に向かって、そのお喋りは悪びれる素振りをせず、ましてや気まずそうに顔を伏せるような事もしなかった。

幼馴染の荒岩毅はニタニタ笑いながら、こちらに手を振っていた。貴一がそれに応えるように手を振り返す。

「そうやけど、それがどうかしたんか？」

よそ見をする彼に構わず、太一郎は用件を聞こうとする。そして、心底から湧き上がる感情を表に出さぬよう、さも落ち着いた態度を装った。もしくは、あまり親しみ過ぎず、ある程度の距離を取った普通の振る舞いを見せた。

真正面からこんなに近く、貴一を見たのは初めてかもしれない。キッチリ揃えた髪に白縁の眼鏡。一見、おとなしそうな顔立ちだが、その所作はどこか自分達の世界とは違う所から来たのだと思いきらされる。

「昨日、荒岩君から君の事を聞いたんだ」

「僕を？　なんで？」

まさか、毅や恭平みたく腰巾着になれ、と“勧告”しに来たのだろうか。太一郎は唇を緩め、ついほくそ笑みそうになった。

心底、自分は舐められたものだ。おかげ様で、相手の底も知れた。貴一は二重顎の顔を近づけてきた。生理的な嫌悪感に太一郎は吐きそうだった。彼だけに聞こえる声でこう囁いた。

「同じ手合いばかりだから、どうしようか困ってたんだ」
「手合い？」

太一郎は彼をキッと睨んだ。逃げるように下がった貴一は慌てるように「冗談さ。僕の馬鹿な勘違いだよ」

「それで、僕に一体何の用なん？ 時間、あまりないんやから」
とりあえず、それだけを聞いておこうと思った。もしも誰かの悪口なら、少し力づくでもこの教室の守りを教えてやらなければならぬ。あわよくば、称号を取り戻せる契機になるかもしれない。

「君のお父さんは、どんな仕事をしていたかな？」

何を聞いて来るのかと思ったら。太一郎は今更ながらと呆れながら、「毅から聞いたんやないの。僕のお父ちゃんは特高に――」

貴一は手を左右に振る。「それは、聞いたから知ってるよ。君のお父さんは特高のどこの部署にいたんだい？」

優等生を凝視する太一郎は、何か自分がおかしいのに気づいた。何かに怯えている。そこまで聞いてきたのは、彼が初めてだっただろう。

それがどうなるというのか。黙っているのと嘘をつくとは、全然違う。自分は肝心な事を伏せただけで、嘘についてはいいない。何も命を取られるわけでもないのに。

さきほどから、教室の中はとても薄暗く感じた。また雲行きが怪しい。さらに、米印にテープが張られた窓のせいで、貴一の顔が影法師になって見えにくい。しかし、黒い瞳だけがこちらをじつと窺っている。これじゃあ、まるで尋問だ。太一郎は、不快感を通り越し、えも言われぬ薄気味悪さを目の前の少年から感じた。

「……文書を調べる係」

「という事は、一課や二課じゃなかったんだ」

得意げな貴一は、まるで鬼の首を取ったかのようなうだ。

「そうさ」

「どんな名前の部署だったの？」

馬鹿みたいにしつこいヤツだな。太一郎は毒づいた。空地の横にあるどぶ池で、蛙みたいにおとなしく蠅でも喰ってろよ。

「……検閲課」

貴一は、耳の遠い老人みたいに顔の横に手を立てる。「何だって？」

「検閲課や！」

太一郎は席を立ち、怒鳴るように言った。教室中の雑談が一斉に静まり返り、級友達がこちらをじっと見つめる。皆の冷たい眼は、（少なくとも、太一郎にはそう思えたが）大声を上げた彼だけに注がれているみたいだった。

そして、それはあながち間違いではない。

「何も怒る事ないだろ。ビックリしたな」

「お父ちゃんはな、病気になるまで一日も休まず、ちゃんと頑張ってたんや。君からすれば、地味な仕事はしてたかもしれへんけど」亡くなった後も、太一郎は父を尊敬していた。今思えば、寡黙で口数が少なく、厳格な父親と話したい事はたくさんあったはずなのに。もう少し感情が押さえずにいたら、太一郎は泣いていたかもしれない。

「知ってるよ。一年前に亡くなったんだろ」

「それが、どないしたん？」

もうこれ以上、話をしたくなかった。

「君のお父さんの仕事部屋を見せてくれないかな？」

どうして。そう聞くべきだったのかもしれない。しかし、あまりに突飛な頼み事に太一郎は言葉に迷ったのである。

「僕はさ、将来、特高を目指そうと思ってるんだ」

そしたら、ちょうど君のお父さんが……。貴一が話を進めていくの

を聞きながら、太一郎は考えてある結論を見出した。

「だから、今度良かったら、お父さんの仕事部屋を見せてくれる？」彼の来るなら、他の連中もつれてくるだろう。これを機会にもう一度父の偉大さを知らしめるにはいい機会になるかもしれない。二つ返事で許可するには、いい気分のする相手ではないが。

太一郎少年は静かに答える。「別にええよ。毅達も一緒にええか？」
「勿論」

貴一は眼鏡のずれを直しながら言った。その様子を見て、彼は對抗するように小さく微笑んだ。

脳裏に小気味の良い金属音が響いた、ような気がした。その幻聴は、まるで路面電車が走る線路のポイントが切り替わる音を想起させた。

太一郎は後悔した。後に、これが二度目の失敗となる。

《次回へ続く》

第五回 勇氣と決意

一 餓鬼大将

いつの世にもどの国でも、そしてどの町の学校でも、餓鬼大将は欠かさない存在である。太一郎のいる張茂町の第五国民学校も例外ではない。

所属の六年五組はもとより、学年、下級生らを牛耳る和田勝がまさにそうであった。

大人と遜色しない大柄、毬栗の大きな丸頭、大木の幹みたいに太い腕、ガニ股で歩く足。本人をまったく知らない者が見れば、その風体から中学生と間違えるだろうし、およそ小学生とは思わないだろう。

少なくとも今のところ、校内で勝少年の残忍な性格を知らない児童は誰一人いない。彼の在学中に張茂第五国民学校へ入学した奴は外れクジだと、自身も含めて皆が知っていた。

勝少年の悪名は、様々な噂で脚色され肥大化していった。誰に一体何をしたかは定かではないが、陰で涙を流した生徒の数は計り知れない。

よって、彼の取り巻きを除けば、一団に誰も近づかないよう用心しながら、警戒心を研ぎ澄ませるのを怠らず、廊下を歩く時も便所にいる時にも、口を固く閉じ、端に寄って縮こまりながら移動する。もしも、彼の悪口を言おうものなら、誰かが告げ口をしたわけでもないのに、地獄耳のように本人に伝わってしまうのだ。そして、その日の内に袋叩きの憂き目に遭う。

誰も餓鬼大将の噂をしなかったし、彼が歩いてきたら蜘蛛の子を散らすように逃げていく。災厄から遠ざければいいのだが、無情にも餓鬼大将の方からやって来る場合もある。その時は、大抵の者は諦めるしかない。頭を下げて、僅かな菓子差し出すなり、漫画や

雑誌を差し出すなりをするしかない。

服従と捕虜を良しとしない少国民達——『生キテ、虜囚ノ辱メヲ受ケズ』を誰もが、低学年には死ぬまで空暗記して心得している——やはり餓鬼大将の存在は、鬼畜米英よりも恐ろしかった。

大東亜戦争が始まる前、和田少年の将来は荒くれのチンピラかヤクザだろうと陰口を叩いていた家族や他の者も、今では軍人に一番向いているというのが大半になった。

本人もすっかりその気になり、今から将校になったつもりで以前にも増して居丈高に振る舞っていた。同学年や下級生に対して勝手に階級を付けた。

彼の被害に遭った者は、彼の手下の一人が持つ階級帖なる備忘ノートの一覧に、名前と学年組と階級——大抵は、二等兵がほとんどだ——が書き加えられる。現在では、学校のほとんどの生徒の名前が載っているだろう。

ちなみに、和田少年の階級は（自称）大将とされている。初等部の長、六年生になって間もなく、現実の軍隊ではあり得ない特進を自己申告した。

格上の命令は絶対であり、“上官”があつた餓鬼大将であるなら尚更だ。同学年が格下なのだから、当然その下の学年の最下層の下っ端は階級さえも与えられず、捕虜と同格の扱いを受けて虐げられた。肩がぶつかったならともかく、目が合っただけ、中には視界に入つたという理不尽な理由だけで、本人の気分で標的が決まってしまうが、本人達には拒否する権利もない。

しまいには先生や両親も匙を投げてしまったのか、挙句に軍国少年らしく健康優良と賞賛する始末だった。

実のところ、密かに期待をしていた事が、太一郎にはあつた。

成績も悪く、性格のひねくれた乱暴者が、金持ちで頭のいい鼻持ちならない東京者の存在に、気分が害さないわけがない。速攻に標的にされた半田貴一が、“皆”の面前で一寸刻みに五分試しになる瞬間を心待ちにしていた。

しかし、都合よくままならないのが現実である。両者はどういうわけか接触もないし、一度も衝突も起きていない。

貴一の噂をあの地獄耳が聞きつけて、和田少年が四年二組の教室に顔を出して、「半田貴一って奴はどいつや？」と言ってくるような事はなかなか訪れない。

これは毅らも同じく考えたいのか、「半田君も運がええな。俺や太ちゃんなんて大昔に、酷い目に遭うたいうのにな」

今思い出すだけでも、嫌になるぐらい情けない過去を振り返るつもりなど毛頭ない太一郎は適当に相槌を打つと何も言わなかった。

窓辺からはるか遠くに見える砲台山を見ていた。

近いうちに必ず、前々から約束していた砲台の中を見せてもらうのだ。砲台守という重役に就くからには、その中身を見ないわけにはいかない。どうしても無理なら、春乃に嘘泣きでもしてもらって、ゴネ得してもらうしかないだろう。

そんな事をボンヤリと考えながら、時間は放課後へと瞬く間に過ぎていった。

後に降りかかる災厄が、その幼馴染が運んでくるとは露にも知らず、大砲の内部を雑誌にあった基地の図説を思い出しながら、太一郎少年は操縦桿を握る様に夢想していた。

二 春乃の奇行

不運というのは予兆があるものだが、大抵の者は見逃してしまう。いつもオカシイ奴だとは思っていた。しかしなぜかその日に限って、春乃の奇行がいつにも増して太一郎には目立った。

まず今朝の出来事になるが――。

連夜の警報が祟り、ただでさえ眠りは浅い。定刻よりも少し早く目覚めた太一郎は、不明瞭な意識を押しつけて背中の震えを感じた。何者かの目線と気配を感じるのだ。襖の方を見やったがしっかりと閉じられている。部屋の中には自分以外に誰もいないはずだ。押

し入れも引いてみたが空っぽだった。

父の総爾が“戻ってくる”にしても、お盆まではまだ日も遠い。はて、と眠気まなこで立ち上がった太一郎は、依然として執拗な視線に捉われている感じがして怖気立つ。

ふと後ろを振り返った時、部屋の窓（そこは二階のはずだ）に映る人物に寝ぼけ眼を眠気が吹き飛ぶように露散した。

いつも知っている彼女の顔は窓にへばりついて、しきりに何かを訴えていた。口がモゴモゴ動いているのみで聞き取れない。

窓を開けて事情を聞くのも出来ただろうが、普通ならば、まずここは大声で悲鳴を上げるのが筋だ。

「どうしたん、太ちゃん！　こんな朝早くから――」

妙子と巴が部屋に駆けつけた時には、少女の姿はどこにもなかった。悪い夢でも見ていたのではないかと最初は思った。

しかし、それは夢ではなかった。一階に下りて、“ライオンマーク”の入った歯磨き粉から桃色がかった粉末を歯に振りかけて磨いている太一郎は、再度“怪異”に襲われた。

もともと、先刻ほどの戦慄はない。

何の気なしに前方を見ると、目の前の鏡に春乃の顔は端に映っていた。咄嗟に目が合い、彼はさっと振り返ったが、少女はどこかへ足早に消えた後だった。

それから、朝食を済ませてからも、洗い場に食器を運んでいる時に、誰かの足音が聞こえた気がした。それも、大人の足ではなく、もっと軽やかな感じ。

さらにその直後、集会の体操と並ぶ朝一番の苦行――もともとこれは一か月に一度の服用であつた――である“まくり”を飲もうとしていた時、不意に鏡の中にいる自分の顔の端に、再びあいつが映り込んでいた。

その際、生臭さが喉につかえ嘔き出してしまった。

咳込んだ太一郎が顔を赤くして、怒り心頭のまま外に出たが、その姿をやはり煙のように消していた。

「なんなんや、あいつ……」

さらに登校時、同じ学区内の児童達から適度に距離を取りながら、投げやりに箒を掃く春乃の目は、集団の中の太一郎を確実に捉えていた。

「あかんよ、絶対にあかんよ」

彼女を横切った際、そう呟いているのが聞こえた。

しまいには、画用紙に収まりきらないほどの字で『かあん』と書いてまで訴えてくる。

「なんや、あの女。けったいやな」

“あかん”の間違いやろ」

「あれが、噂の知恵遅れの春乃や」下級生達が口々に囁く。

これ以上、後輩達に無用な心配を抱かせたくない太一郎は「気にせんで、歩き」とぶっきら棒に答えた。

「なんか、班長にだけ言っているみたいやった」

誰かの言葉で、太一郎は意気揚々な調子で歌い出した軍艦マーチの音程をもう少しで間違えそうになった。頭の中で、『平常心』という名の軍艦が舳先から沈没していく。

絵はともかく、字をろくすっぽ知らないはずの少女が、順番を間違えているにしてもどうやって書いたのかは太一郎の悩む所だが、今は重要ではない。

一体何が“かあん”なのだろうか。

まさか学校にも出没するのは想定外だった。

休み時間、教室の窓を見つめていると、窓辺の下端からぬつとその顔が上がり、太一郎は度肝を抜かれ悲鳴を上げた。

「どうした、太ちゃん！」穀や恭平が顔を向けると、尖った声で喚いた。「皆！ 知恵遅れの馬鹿娘がおるぞ！」

教室にいた生徒達が太一郎のいる窓に駆け寄るのが早いか遅いか、春乃は全力疾走で校門の方へ駆けて消えた。

悪童達が齒をむき出し、奇声を上げ、続々と教室を出ていく。

「捕まえて、フクロや！」

「あいつは今日こそ、気違い病院行きや！」

砲台では書いた絵がすぐて見直したばかりだというのに、やはりどこかおかしい奴だ。しかし太一郎は気になっていた。何かを警告しているのかもしれない。それでは何がダメなのだろうか。

「何だい、あの馬鹿は？」

後ろから貴一が、高所から小馬鹿にしたような声で言った。

「さあ」とそっけなく返し、それ以上何も言わずにいた。

最後に、下校中にもやはり誰か（正体はもう分かっているのだが）の気配を感じた。

太一郎はわざと足早になり、通りの角を消えるように急いで曲がった。追跡者が慌てて追いかける音が聞こえ、唇をほころばせて身を屈める。

ついさっき通った角から、何やら四角い物体が出てくる。ゴミ箱を逆さにして、上から被っているマヌケな追跡者。その目の前に直立し壁になる。

いきなり前進できなくなり、どうもおかしいと思ったのか、そいつは被っていた箱を上げて素顔を晒した。

ただでさえ大きな目をしている春乃は意表を突かれ、蛇に睨まれた蛙のように硬直し、口をパクパクと痙攣させる。

「ハル。なんで、僕を追いかけるんや？」

黙ったまま、彼女は何も言わない。業を煮やした彼は頭を掻きながら追及を続ける。

「朝からずつと何がダメなん。怒らないからさつと言うてくれ。このままじゃ、気になって夜も眠れん」

僕とお前の仲やろ。砲台守同士やないか。

どうしてこんな奴に言葉を柔らかくして言わないといけないのか。以前の自分なら胸倉を掴んで、その脳天に拳骨を振り上げるのにも躊躇しないはずだったのに。

「あかん」

「何がや？」

「山へ……いったらあかん」

「山って、まさか砲台山か？」無言で春乃は頷く。

「それだけ言いたかったんか？」

こくんと、春乃は強く頷いた。

「そうか……」

頭の中に鎮座する砲台が赤い瘤癩玉が発射した。そして『堪忍袋』と書かれた大弾幕を真つ二つに引き裂いた。ザンバラで乱れた頭を、太一郎は渾身の拳骨を振り下ろした。まずは朝の仕返し。さらに、彼女の額を指ではじいた。

春乃は少しだけ後ろにのけぞった。

「嫌や」

どうだと言わんばかりに、彼女を見降ろす太一郎。しかし、春乃は一行に泣きだす様子はない。それどころか、キョトンとしている。

「太ちゃんのは、昔から痛くないよ」

そう告げるや否や、春乃は彼の額に自分がやられたのと同じくデコピンを見舞った。

予想外の激痛に見舞われた。彼は地べたに転んでのた打ち回る。

そして起き上がり、「こいつ！」と怒りを任せて少女に躍り懸かる。

「何が、ダメや！　今さら山へ行けないわけないやろ！」

「行っちゃいけん！　太ちゃんのためじゃ！」

「何を頓珍漢な事を言うとるんや！」

猿のように爪で引っ掻く少女に、押され気味の太一郎が乱闘している光景を、荒岩毅の父である郷蔵が見かけ慌てて引き離すまで、二人の取っ組み合いは終わらなかった。

大工の棟梁である郷蔵は、やはり太一郎が少女を苛めていると勘違いしたのか、彼にだけ頭を小突いた。

「ええか、女の子を苛めたらあかんぞ」

巨体の後ろから顔を覗かせて、春乃が「山に行ったら絶対にあかんよ」と釘を刺す。

虎の威を借る狐めが。太一郎は頭を下げた謝りながら、その顔を恨

めしく睨んだ。

もっともこの後、彼女をうまく巻き、家には帰らずにまっすぐ砲台山へ向かった。女子の言葉で引き下がるわけには到底いかないのが少国民たる自分の立場だと考える太一郎だった。

彼女の忠告は間違っただけではなかった。それを聞き流した少年は、砲台の前で岐路に立たされる事になる。

三 どうする？

不運は兆しを見逃せば、諦めて受け入れるしかない。太一郎もそう思っていた。

曇りの午後、太一郎は砲台の傍の岩に座って見張り番をしていた。今日もまたいつもと違っていた。しかし、あまりに不自然で不可解である。

いつもは太一郎の座る岩に腰掛けて、絵を描いていた春乃の姿がどこにもないのだ。最初は、何か用事でもできたのかと思った。さしずめ、何か失敗をして酒屋の両親に捕まり、こっぴどく叱られているとか……。

だが、いくら待っても春乃の姿がない。ここに通うようになってから、一度もこんな事はなかったのに。

おかしいと思った矢先、森を掻き分けて歩いてくる彼女の姿があった。考えすぎていようと、太一郎が立ち上がり手を振ろうとした瞬間、やって来たのが彼女一人ではないのに気づく。

少女を突き飛ばすように後ろから数人が続いて分け入って来た。自分よりも少し年上の少年達。そして、年嵩の上級生の後ろに控える、見覚えのある風貌に、間もなく太一郎の体が雷に打たれたように硬直した。

そいつこそまさに、張茂国民学校六年五組の餓鬼大将――和田勝その人だった。

達磨のような大柄、太い四肢。肉厚な胴体からせり出した、くび

れの無い頭部。獯猛且つ凶暴な顔立ち。一度見たら、忘れる者はいない、餓鬼大将の紋切型を見事に具現化した図体は、小柄な太一郎からしたら巨人に等しい。

手下の（牛乳瓶の底に似た老眼鏡みたいな眼鏡をかけた）一人が太一郎の顔と名札をまじまじと見つめつつ、噂に名高い分厚い階級帖を取り出してページをめくる。

「四年二組、神長太一郎。階級は、上等兵。特徴は泣き虫、弱虫、腰抜け、足が遅い。備考、父親は特高勤めで、もう死んだ」

弱虫と泣き虫は意味合いが同じ気はするものが、今の太一郎に突っ込みを入れる余裕などない。敢えて指摘するならば、父の死についての記述もどことなく投げやりな感じがする。

違うページをめくり、牛乳瓶は言葉を続ける。

「月影春乃、十歳。階級は、捕虜。特徴は、馬鹿、阿呆、間抜け、頓珍漢、知恵遅れ。備考、猿みたいに足が速い」

春乃が太一郎の元に走り寄る。その顔は痛々しく頬が赤くはれ上がっている。殴られたのだと分かった。

「絵を取られたんじゃない。ここに案内せえ言うたんじゃない。太ちゃんはここに来たら、あかんかったのに……」

あのしつこい警告はこれだったのだ。しかし、すべては後の祭りだ。結局、春乃が正しく、自分が間違っていたのだ。

「今日から、ここは俺らの領地や。お前らは出て行け」

後で知ったのだが、彼らが絵描きに夢中になっている春乃を捕まえた時、彼女が持っていたが用紙の裏にあの砲台が描かれていたのだ。画用紙を取り上げられ、拳を振り上げた尋問の末、春乃は辛うじて逃走に成功した。

そして、翌日の朝から太一郎に警告しようとして、自分の力で絵を取り返そうとした。

しかし和田少年は、女一人が枝の切れ端を武器にして勝てる相手ではなかった。逆に捕獲された末、無理やりここへ連れてこられたのだというわけである。

「嫌や！　うちはここから出ていきとうない」

「それならこうや。おい、やれ」

春乃の目の前で、手下の一人が画用紙を破り捨てた。

彼女は半狂乱になって、泣きながら地面に散ったそれらを掻き集めた。それを見て、餓鬼大將達は笑いを上げる。

和田少年が太一郎を睨みつける。

「神長。お前は、こいつと違って頭が良いみたいやから分かつてるやろな。お前だけは特別にここにいてもいいぞ。階級も軍曹に上げてやる」

今、彼らの命令に応じたら制裁を受けずに済む。それどころか、ここに残ってもいいと言っている。

実は、一年生以来、彼らが太一郎を標的にしなかったのも、毅と同様に父親の存在があったからだった。

餓鬼大將は、闇雲に切れ端を拾い集める春乃の髪を引っ張る。泣き出す少女を意も介さず、彼は太一郎に言った。

「その代わり、この馬鹿に痛めつけろ」

彼の言葉に、太一郎は迷った。言う通りにすれば、今までのように変わらずにいられる。しかし――。太一郎は、亀のようにうずくまる春乃に近づく。

だけど、本当にそれでいいのだろうか。こいつはただの馬鹿かもしれない。でも何も悪い事などしてはいないはずだ。

それなのに、なぜ痛い目にあわさなければならぬのか。

砲台の前にいた太一郎に背後から小さな声が囁いた。

（坊。女を置いて逃げる奴より、泣かす奴の方が最低や。強い男なら、そないな事せえへん。砲台守の太一郎ならどうする？）

清照の言葉に、心を覆う霧が瞬時に晴れた。

砲台守の太一郎ならどうする。すべき事は決まっている。彼に戸惑いがなかったわけではなかった。相手は自分より年上で、取り巻きもいる。それでも今の太一郎は、自分のしようとしている暴挙が間違っているとは別段思わなかった。

当然、その衝動を止めるつもりもなかった。

大きく息を吸い、少年は振り上げた拳を餓鬼大将の期待と脂肪の膨らんだ顔面に力一杯殴りつけた。餓鬼大将は見事に後ろに吹っ飛び、苔の生えた地面に倒れた。間髪入れず、急所に目一杯の蹴りを入れた。

同級生でやる武道の試合ならば反則になり、卑怯者の謗りは免れない禁じ手だろう。喧嘩も同様だ。だが今やったのは、そのいずれでもない。

天誅だ。太一郎は自分に言い聞かせた。下級生の反逆というのは、意外と都合がいい。

「太ちゃん」顔を上げた春乃の涙は消えている。

取り巻き達の顔が驚愕に変わる。太一郎は彼らにも襲いかかった。砲台守の太一郎に後悔の念はない。あるのは、今まで経験しなかった言い知れぬ達成感のみであった。その後に待ち受ける、結果などもはやどうでもよかった。

統領がやられたら、子分は皆散っていくものだが、彼らの忠誠心は意外と強かった。まもなく餓鬼大将達の反攻が始まった。怒りに燃えた大将が復活すると、太一郎はあえなく袋叩きにされた。

「お前の階級は、はく奪！ 今日からお前は最格下の捕虜に永久降格したる！」

和田少年が吠えた。さっきの仕返しとばかりに、太一郎の急所を踏みつけた。

一瞬、みぞおちに電撃が走り、声も出ないほどの激痛に襲われ、砲台守の少年は失神した。薄れる視界の端で、清照が怒鳴りながら登場し、彼らを一人残らず捕まえ、何かを言ったが、地面に伏した太一郎の耳にはおぼろげにしか聞こえない。

この事を言うたら、憲兵が国家反逆罪でお前らを迎えにくるか、特高に逮捕されるとか、云々というのを、意識を取り戻した際に春乃から聞いた。

助け起こされた太一郎に、清照はこう言った。

「ようやくたな。お前は立派な砲台守や」

腰を上げた彼は、春乃の姿がないのに気づき訝しんだ。どこに行ったのかと思った矢先、太一郎を呼びながら茂みから現れた。速過ぎる現実が、こみ上げる嫌な予感を追い抜いた。少女が、両手に満たした冷水を彼の股間に溢した。

少年の断末魔がほとばしり、山中の鳥が逃げるように飛び去っていく。

少し下に流れる川から、春乃が手に汲み上げて来た水は、時期もあつてか心臓が止まるぐらい冷たい。痛みは収まるどころか、針で刺されたような激痛に変わった。まさに、傷口に辛子を塗る荒治療である。

太一郎は、死に物狂いで患部を地面でこすった。

「よせやい！ やっぱり、お前は疫病神や！ 今日は大厄日や！」

清照が高々に声を上げて笑った。どこかで、鳥の渴いた鳴き声があった。落ち着いてくると、太一郎も同じく笑った。

梅雨時に珍しく、木漏れ日が点々と地面に注いだ。

あいつらの事だから、また仕返しをしてくるかもしれない。学校一の餓鬼大將が、下級生に殴られたまま、ノコノコ引き返すとは到底思えない。

それがどうした。少年にはさっきまでの恐怖はなかった。自分達はいつか死ぬつもりで、今を生きているのだ。餓鬼大將ぐらいでビクビクしていてどうする？

身の内から沸き上がる熱気と興奮に、砲台守の太一郎は酔いしれた。

ずっとこんな日が続けばいいのに。彼女を無理に引き剥がしながら、太一郎はそんな思っていた。ずっとこのまま、この砲台の見張り番をして、鬼畜米英との決戦に備える毎日を過ごす。彼は一層強くそれを強く望んだ。

しかし一方で、それがいつまでも続くとは考えていなかった。父が死んだようにいつか唐突におわるのだと予見していた自分を心に

秘めていた。

そうだ。世の中はただ流れていくのだ。

四 砲台の中

「よし！ 今日のはな、大砲の中を見せたる」

清照が放った一言は、顔中に絆創膏を貼られ、情けない思いでいる太一郎の傷心を打ち消した。死人のように沈んでいた少年の目は火を点けたように輝く。

「本当に？」

「ああ、ホンマや」

あまりの歓喜に大声で叫びそうになった。ずっとこの砲台守をしていた甲斐がやっとここにきて巡って来たのだ。

「……うちも見たい」

彼の後ろから幽霊のような猫背気味の春乃が顔を出す。

「なんで、お前もついて来るんだよ」

「うちも見たい」 同じことばかり言って、鬱陶しい。

太一郎は少女をつまみ出すように、しっしと手を振る。

だいたい女は兵隊さんになれない。女子挺身隊にでもなって、弾丸やら砲弾やら、軍服を作るのが役割なのだ。

もっとも、こいつにできたらの話だが。

「うちも見たい」

「うるさいなあ。お前にはどうでもいいだろう」

「どうしてあかんのじゃ？」

女の中には、こうやって駄々をこね始めるのだから始末に負えない。特に、こいつは昔からそうだ。

「ええやないか。ハルちゃんも一緒に見せたる」

ちえっ。少し気分を害しながらも渋々承諾して——この時の、万歳をする幼馴染にもカチンとくるものがあつた——太一郎は清照に連れられて砲台の前まで来た。

半球型のドームから突き出す大砲は、いつ見ても圧巻の一言だった。これだけでも心強いというのに、この近くの山にはいくつも配備されているというのだから恐れ入る。

清照は壁にある銀色のハンドルを何度も回し始めた。

「何で、お前も着いて来るのさ？」

女々しいと分かりながらも言葉を浴びせる太一郎の顔の頬に向かって、細い指を突き出された。ちょうど餓鬼大将に殴られた箇所なので、変な声が出るぐらい痛かった。

「イタタタ、何するんや！」

「うちは、何回もあかんって言うたのに」

その一言で、少年の氣勢は見事にそがれた。悔しいが反論の糸口は見つからないのも間違いじゃない。本当にこいつは頭がよくないくせに、字も満足に書けないくせに、どうしてこんなに口達者なのだろうか。

太一郎は小さく拳を振り上げる素振りをしようとしたが、相手は全く動じないので嫌になって止めた。

「喧嘩すんな。見せたらへんぞ」

上官である清照が発する、鶴の一声は絶大だ。二人の口論は見事に休戦を迎えた。この決着はいつかの機会にて、と少年は口を閉じた。

沈黙が続き、金属の掠れる音だけが周囲を支配する。しばらくして、重苦しい音と共に扉が開かれた。その厚さは太一郎が思っていたよりも薄かった。薄暗い砲台の中へ、清照は入っていく。

「二人とも、ついてきい」と聞こえ、お互いに顔を見合わせた二人は大きく息を吸ってから、太一郎を筆頭に砲台の内部へと足を踏み込んだ。

そこは意外と狭い場所だった。しかし、太一郎が以前から『少國の友』や『少年倶楽部』で読んだ事のある軍事基地の図説にあったのと同じような、そして想像していたものに似て非なるものだった。複雑で難しそうな機器がいくつもあるが、あまり大掛かりなもので

はない。

小さな部屋——そこは部屋というよりも倉庫に近いぐらい狭い。大人が三人ぐらいい一杯になるだろう——の奥に一つだけ添えられた椅子、そして潜望鏡のようなものが壁から突き出している。潜望鏡の先には、扉に付いていたハンドルが二つもあった。

「このハンドルでな、左右上下に筒を調節して、標準を決めるんや」座ってみ、と勧められて恐る恐る座椅子に着いた太一郎は目の前に下りた潜望鏡に顔を密着させた。そして驚いたのは、眼前にははるか遠くの景色が見えた。ちょうど中心には、標準木の十字の印が浮いているように見える。

太一郎は徐にハンドルを回すと、なんと目の前の風景が右に動いた。もう一つのハンドルを回すと前に広がる街並みの光景が上昇し、青い空へと変化した。

昔、親に連れられて縁日の覗きパノラマを見物した記憶があったが、今の状態はまさにそれだった。

「どや。いい眺めやろ。方向照準座というてな、ここに座って、大砲を撃つんや」

「この大砲は、なんていう名前なんですか？」

太一郎は長年の疑問をぶつけた。ここに初めて来て以来、どの本を見ても載っていない代物だからだ。

「実はな、名前はあらへんのや」

「そんな事、あるんですか？」名無しの大砲である。

「砲身や、それを支える遙架、このハンドルや照準器。皆、別々の砲台からかき集められて、ここで組み立てられたんや。他の山にある分も同じようなもんやな」

「なんで、そないな面倒な事したんですか？」

「なんだか失礼な気がしたが、好奇心は簡単には止まらない。」

「高射砲いうんはな、ただでさえ大きいさかい、できたもん運ぶより、部品をここまで運んだ方がええやろ、数人がかりではとてもあかんわ。砲身だけでどれだけするかわかるか？ 4トンもするんや

で」

太一郎は、大砲の想像もできない重量に言葉を失った。

清照は計器に息を吐いて、汚れを払いながら「こいつは、三式十二糎高射砲いう最新鋭の大砲を流用して造ったらしくてな、筒を動かしているのは従来の機械と違って、油圧で動くんやぞ」

その代わり手入れも大変らしく、すぐほっておくと錆びつくらしい。

「弾もすごいで。見てみ」

そう言つて、彼は操縦席のわきに置いてある、4寸（12センチ）ほどの紡錘形をした黒い物体を持ち上げた。太一郎はもう少しで素っ頓狂な悲鳴を上げるところだった。

どう見ても、それは砲弾だった。

「使用済みの空砲やから大丈夫。この間の晩、ぶっ放したやつやねん。使用前なら、23キロぐらいあるで」

こちらが持ったら、倒れてしまふに違いない。清照も興に乗ってきたようで、悪戯の種明かしをする子供みたいだった。

「こいつの射程距離は、なんと5里（約20キロメートル）！ 太陽も撃ち落せるで」

「撃ったらあかんよ」春乃がボソリとたしなめた。できるわけがないだろ。

「ホントは大阪で配備される予定やったらしいけど、三月の空襲でやられてしもうた。ここのは、そんな時の使える残骸を集めたんやろな」

「でも、こんな暗いところじゃあ周りの空が見えないよ？」

春乃の言う通り、清照がランプの放つ微弱な光を消すと、文字通りの真っ暗な闇となった。背後のどらからかすかに光の筋が細く這うだけだった。

「そやから測定する人間もおる。他に弾を運ぶもん、聴音機で敵機しらせるもん。全部十人以上入るんやけど……」

実際これを管理しているのは、大和田という上官と清照に豊道、

その他に二名だという。彼らも二等兵であり、戦った経験はまだないらしい。

清照は、人手不足はこのご時世では当たり前だと嘆きつつも、「まあ、いざいう時は、根性で乗り切ったるわ」

「どれぐらいの速さで弾は飛ぶん？」

「もちろん、早いぞ。敵さんが撃たれたと気づいた時には、立派なお陀仏さんになっとる」闇の中でにやりと清照は唇を歪める。

自分もいつかこの大砲を動かしたい。太一郎は強くそれを望んだ。兵隊さんになる頃にはこれが残っているといいな。

「太ちゃん……」

闇の中から春乃の声が聞こえる。「何や？」

「うちの言う通りやった……」

「すまん」素尚に謝っておいた方がいいだろう。

「うちもそこに座りたい」

何を言っているんだ。女はダメに決まっているだろう。しかし清照は簡単に許してしまう。

「覗きカラクリみたいや」

小さな部屋の中で、春乃の笑いが響いた

五 父の部屋

夕食後、太一郎は父が使っていた部屋にいた。

灯火管制のために布の笠が下がった照明の紐を引くと、もう数年も使われなくなって久しいというのに、主のいなくなった部屋の中を電球が赤々と照らし出す。

そこには机と書棚を除けば、これといった特徴もないほどの質素さを醸し出す。机の前にポツンと置かれた座布団が、部屋の主の死後移動されずにずっとそこに置かれている。もしかしたら、部屋に入るとかつての父が当たり前のようにそこに座っているのではないかと、誰かが望んだのだろうか。

書棚に収まる円本や図鑑の類も母の妙子の要望により、父の遺品のとしてそのままの状態に保存された。

父の神長総爾は、昭和一八年の十二月の始めに亡くなった。太一郎が八歳の時であった。世間では、五日未明にあったマーシャル諸島沖での壮大な航空戦に沸いていた。

彼にとって、父の存在が極めて曖昧なものであった。

一緒に接した時間は限られていた。そして、時と共に色濃くなる忘却の霧が脳裏に残っているかすかな記憶さえも包み隠してしまおうとしている。

それに対して、何も感慨を受けない自分は親不孝かもしれないと、太一郎は悩む時もあった。特高の検閲課をしていたという事実が、息子が父を知る唯一の情報である。国に関わる仕事をしていただけではない。学校でも習った事だが、国体を腐らしてしまう共産主義者、所謂アカになる危険を孕む物品を押収し、それらを処分する事で内側の国防に貢献している。

自分以外の同年代には、そんな父親を持つ奴はいない。本人の死後さえも、その立派な功績が揺らいだりはしなかった。

だからこそ、あの転校生の存在が皆の注目を奪っているのが気に入らなかった。本人には悪気がないと知りつつ。

太一郎は父親がかつて座っていた座布団に腰を下ろした。少し黴臭かったが、机に向かってみるとなぜか心が落ち着く。

自分が生まれる前、生まれて間もない頃、物心がつく前、いつもここに座って背中ばかりを見せていた。猫背気味の瘦身は、今の清照といい勝負だろう。

家に帰るのも、彼らが寝静まった時間がほとんどで、朝に起きた時には仕事場に向かっていった。いつかここにも、鬼畜米英の手が伸びるだろうと、清照は言っていた。その時は絶対自分も砲台にいる。そして、自分の出来る事を成し遂げて見せる。もしかしたら、そこで自分は死ぬかもしれない。戦地に行く前に死ねば、母や姉はどう思うだろうか。

お父さん……僕は砲台守になったんだ。お父さんみたいに立派な仕事をしながら戦いたい。

そしたら——恐怖を抱かず、いつでも死ねる。

兆しがあったわけもない。その時、太一郎の中で長年の謎が垣間見えた。ふっと浮かんだ答えに、なぜか納得できた。

父は死期に瀕した自分の姿を見せなくなかったのではないか。無用な心配をさせないために……。

太一郎は顔を俯き、目を瞑った。閉じた瞼から何かが漏れ、その上を腕で擦る。

「どうしたん、太ちゃん。お父さんの部屋で」母の妙子だった。寝巻を着ている彼女は、太一郎から見れば少し痩せたような気がする。そう言えば、ここ最近は雑炊ぐらいしか口にしていけないのだ。

それでも、それを不平とするなら贅沢は敵だと思われるだろう。

「何でもない。ごめんなさい」

太一郎は座布団から立ち上がり、部屋の電気を消して襖を開けて部屋を出た。父親の部屋にいる自分は、母は変に思われなかっただろうか？　せめて二人には余計な心配だけはかけさせたくはなかった。

「太ちゃん、お父さんがおんと寂しい？」

「ううん。そんじゃない」

太一郎は母を見上げた。優しさが顔に出ている妙子を見つめる彼は、「ねえ、僕もお父さんみたいに偉い人になれるかな」と、顔を赤くしながら声を絞り出した。

砲台守である自分は、父と比べられるのだろうか。

「なれるわ。太ちゃんはお父さんの子なんだもの」

母親の言葉に、少国民の息子は強く頷いた。妙子の口元が綻んだ。つられて、太一郎も小さく笑った。

数日後、貴一との約束で、彼は再びこの部屋を訪れる事となる。そして、そこで――。

《次回へつづく》

第六回 父の部屋

一 見つけた物

父の部屋を見せるといふ約束を交わしてから数日後の金曜日、貴一が毅と恭平を連れて神長家へとやって来た。

もちろん、徒歩ではない。いま巷で噂に名高い、木炭で走る自動車——四角い車体に、背中には重々しいタンクを背負っている——を初老の執事に運転させて、狭い通りのど真ん中を堂々と乗り上げて参上してきたのだ。

太一郎が彼らの訪問に気づいたのは、門前に停車した車がけたたましいクラクションを鳴らしたためである。自動車のラッパの音が、こんなに神経を苛立たせるものとは知らなかった。何時ぞやの貴一が出した声に似ている気がした。

太一郎には、耳触りで不快にしか感じてならなかった。

外の通りでは、酒屋月影から顔を出した主人は啞然とし、箒を持ったまま春乃も父親に倣って口をポカンと開けている。

他の家からも、主婦や小さな子供がまばらに顔を出す。普段見慣れないものが眼前に現れた時の反応ほど、一寸違わない物はない。

——そうか。要は、自慢か。

彼らの豪勢な立ち振る舞いは、何も自然体ばかりじゃない。

「そんなん鳴らさんでも分かるって!」

後部座席に窓の前まで走ってそう言うのと、やっと貴一達がぞろぞろと出てきた。優等生はともかく、なぜ毅達も同乗しているのかは詮索しなかった。するつもりもなかった。

「約束通り、部屋を見に来たよ」

暇だから、ついでに来たと言わんばかりである。

お前は、童話に出てくる異国の王様のつもりか? 自分の足でろくに歩かないから、今みたいに太るんだ。太一郎は内心毒づいた。

正直、今頃になって、友人達——正確には半田貴一を亡父の部屋に入れるのに気が引けてきた。他の者ならともかく、こいつだけは足を踏み入れてほしくないと思った。だからと言って、今さら無下にはできない。

第一、承諾したのは自分ではないか？ 見栄を張った上に、約束を土壇場で反故にするのは、さすがに太一郎にはできなかった。

それに、彼自身も部屋の中をじっくり調べた事がない。もしかしたら、父の功績を称える代物が出てくれば、貴一達を見返せるだろう。

ちょうど、母達が出かけているのは幸いだった。

「すまないね。いろいろ寄る所があったんだ」

「ええよ、別に。早いところ入りや」

そして、早いところ出て行かせよう。太一郎はそう思った。

貴一に追隨する幼馴染達は、まるでそこに太一郎がいないのかのように、平然と彼を通り過ぎて家の中に入っていく。

どうやら、自分達も金持ちの仲間になったつもりなのか。金持ちなら他人の家の中に、勝手に、しかも我が物顔で入られると思っているのか。

太一郎は、黒い表面が剥がれかけた自分の靴を脱いで、貴一の黒い光沢を放つ靴を踏み台にしながら、上がりかまちに足を着いた。

前を歩く毅の首根っこを掴んで外に放り出してやりたい衝動を抑え、太一郎は無言のまま三人の後に続く。

冷静になれ、太一郎。別に自分だけが除け者にされていたのを僻んでいるわけじゃない。そうじゃない。最初に話しかけられて約束を交わしたあの日から、あまり関わりたくなかったのだ。

そうやって、自分を説得させるために、あの場所を思い浮かべる。そして開け放たれた玄関から見える、向かいの酒屋で突っ立っている少女に一瞥し、数日前の出来事を思い出した。

砲台を乗っ取ろうとした餓鬼大将に、一矢報いた、あの瞬間に感じた胸の高鳴り。今にしたら、よくあんな勇氣（蛮勇）かもしれない

が）があつたものだ。太一郎は、今の自分に、心底で燦る緊張を容易く打ち消せると信じて疑わなかった。

悪名高い餓鬼大将に、果敢にも立ち向かった自分は、以前は決して強くもなければ勇敢でもなかった。ただ、亡き父の背中に頼つて愛国少年の地位に収まっていただけの案山子だった。

それも、あの日で終わった。自分にしかない、本当の勇氣を持っていた。束の間続いた父の威嚴の失墜も今日にて終わるのだ。

少国民の中の優等生たる愛国少年、昔日の神長太一郎は復活する。高まりを増す興奮に、少年の中の確信は鉄壁の要塞のごとく強まっていた。

知恵遅れと皆から蔑まれている春乃は、不安げな顔でこちらを見つめている。彼女に向かって、ゆっくりと頷くと家の奥へ悠然と進んだ。

「君のお父さんの部屋はここかい？」

貴一の声で、彼の思惟は中断された。いつの間にか、奥間まで来ていたのだ。そこに入る前にある右の襖を開けると、そこが父の部屋である。

おもむろに土気色の障子を引くと、そこは昨日と同じ小さな机に二つの書棚だけが置かれた、至って質素な部屋だった。数日おきに妙子が掃除をしているので、あまり埃や汚れは目立たなく整然としている。

太一郎はこの部屋に入ると、いつも、えも言われぬ感傷に襲われる。当時のまま小綺麗にしているせいだろう。逆に、長年使わない物置部屋みたいに埃で汚れ、蜘蛛の巣で一杯に覆われていた方がよかったかもしれない。

非現実な期待を抱いた所で、現実は変わらないのだ。

それでも、亡父の部屋を訪れる度に味わう妙な新鮮さを、太一郎はひしひしと感じずにはいられなかった。

太一郎はまず目の前の机――そこには父がいつも座っていた座布団がポツンと置かれている――の引き出しをゆっくりと引いて中身

を検めた。拍子抜けはしたが安心した。中身は空っぽだった。母が
とうの昔に片付けたのだろうか。

書棚もまた同じだった。中に収まっているのは、古い文芸雑誌や
円本の小説、哲学書の類ぐらいで、特に珍しいものはない。書棚の
上にも天井ぎりぎりまで厚そうな本（図鑑、歴史）が重なっている。

太一郎達はしばらく部屋の中を観察して廻った。と言っても、そ
んなに広い部屋ではないし、置いてある物も限られている。押し入
れは空だった。紐で括られた古い朝日新聞の束が部屋の隅に置かれ
ていたが、真珠湾の奇襲があった一二月八日の日付から、父の倒れ
た日の朝刊までの内容だけで特色はなかった。

さらに、机の横に、これまた古めかしい蓄音器――上に乗せる笠
はない――が置かれているが、肝心のレコードはどこにもない。こ
れも母が捨ててしまったのかもしれない。

結局、父の仕事に関する品々は一向に見つからなかった。

「もういいだよ、皆」

太一郎の言葉を聞いて、二人が溜め息を吐いて部屋から出る。

「もう少し待ってくれよ」と止める貴一は書棚を眺めながら、「あ
の上の本はなんだろう？」と指を向ける。

「どうせ、同じ歴史書か何かやないか」

太一郎は棚に足を掛ける。父が生きていたら、大目玉をくらって
いたかもしれない。上に寝そべる重そうな本を一冊取り出そうと力
を入れた。

本を持った太一郎は拍子抜けした。

大きな図鑑は、思っていたよりも軽かった。どうやら、中身の本
が書言っていないみたいだ。埃の被っていないカバーを少し傾け
ると、中に何かが入っているのか、カタカタと転がる音がする。

棚から降りて、太一郎がカバーを逆さにすると、数枚のレコード
円盤が転がり出てきた。その円盤には、日本語ではない言葉が書か
れている。

「何これ？」

「知らん」

「僕、これ知ってるよ。赤盤だよ、コレ」

赤盤とは、ロシアという外国で売られていたレコードである。今から10年前の発禁処分になった代物である。その理由は、ロシアが共産主義国であったからだ。つまり、彼らの目の前にある赤盤とは、鬼畜米英と並ぶ仮想敵国、共産党の国ロシアから輸出された敵性音楽なのだ、と貴一は淀みなく説明して、毅らは阿呆のように口をポカンと開けて聞き入り、そして太一郎は――。

「き、きつと、お父ちゃんが昔押収したレコードを置いて――」

「それはおかしいんじゃないかな？」

「半田君、それはなんでや？」

いつの間にか、毅は部屋の中に戻っていた。

「だって、そうじゃないか。特高の検閲で押収した赤盤やアカ原稿はどこか倉庫に入れられるか、焼かれて捨てられてるはずだよ。どうして、一職員の神長君のお父さんの部屋にあるのさ？」

「そんなん、知るわけあらへん……」

今日もまた、雨が降る兆しが見えず、初夏の日差しが米印の窓から降り注ぐ。じりじりと気温が上がり、太一郎の額にもうっすらと汗が流れ始める。

にもかかわらず、体が少しずつ冷たくなりつつあるのを太一郎は感じた。自分の心臓が外に抉りだされた様を、なぜか想像した。

「しかも、誰にも見つからないように隠してるなんて、余計おかしいよ」

まるで貴一は江戸川乱歩の少年探偵団に出てくる小林少年にでもなったかのような振る舞いだが、挿絵に出てくるそれとネチネチした物言いをする顔とは、まったく似て非なるものだった。

どちらと言えば、人間の子供に化けた天の邪鬼だ。仲良くなった男の子を騙してどこかへ連れて行き、少年の顔の皮をはぎ取り、本人にすり替わる。

妄想の嵐が、太一郎の脳裏を掻き乱す。顔を取られた少年はどう

なる？

「つまり、その、どう言う事なんや？」

恭平が恐る恐る聞く。貴一は太一郎の方を一瞥し、眼鏡のずれを直すと、言葉を選ぶように言いきった。

「神長君のお父さんが、蒐集を、していたんじゃないかな？ 仕事で流れて来た物を、こっそりとさ、持って帰って……」

誰もが黙り込み、部屋の中を重苦しい空気が覆う。沈黙は永遠に停止したままではなく、いつかは終わるが来る。その形が最悪であっても同様である。

太一郎が心中に浮かべた、“ある言葉”を形作る前に、誰かが声高に代弁した事で静寂は終焉した。

少し後になってから、その時に強いつむじ風が父の部屋の窓を叩いたのを、太一郎は不思議にも覚えていた。

「こいつの親父は、アカやったんだ！」カタカタと窓の揺れる音を打ち消すように、彼を指差して、誰かが言った。「こいつもアカや！」更に、別の誰かが言った。

二人が逃げるように家から出て行った後でさえ、太一郎のそのまま立ち尽くしていた。書物の詰まった棚を、針に糸を通しているかのように凝視していた。

「事実は小説よりも奇なり」

芝居がかったように肩を竦め、貴一はそう呟いた。太一郎が彼の方を向くと、逃げるように無表情に変わり、真横を通り過ぎて行った。

自分以外いなくなった亡父の部屋の片隅で、少年は力なく足を崩した。

ただ、虚ろ目は、畳に散乱する赤盤に向いていた。

二 密告

夕方、母の妙子が仕事から帰って来るまで、太一郎は父の部屋で

立ち尽くしていた。肩を叩かれるまで、ずっとそうしていたという自覚もなかった。

まず太一郎は、貴一達が去ってからそのままの畳を見渡した。他の本のカバーから見つかった赤盤が何枚も包み紙からはみ出し、畳を覆うように散らばっている。

曲目や作者はカタカナとは違う、異国の角ばった文字で記されている。また、原稿の束――題名は難しい漢字ばかりで書き殴られて判読できないが、文中には『労働者』や『権利』、『ストライキ』などの言葉が目立つ――も端を留め金で固定されたまま、レコード盤に混じって保存されていた。

それらに共通しているのは、ただ一つだけある。いずれも、一番上に赤字で『不許可』と大きく判が押されている。

すなわち、公衆の目に触れるのを許されない事の証左である。悔しいが貴一の言う通り、こんな場所にあるはずのない、あつてはいけないはず。本来ならば、焚書にされていなければならない。

どうして、父がこんなものを自室の棚に隠していたのか、太一郎にはまったく理解の範疇を逸脱していた。

父は、特高の検閲課に勤めていながら、その特権を利用して押収していた敵性音楽の円盤や、発禁処分された作家の初稿をくすねていたのだ。

確かに、父が検閲課という地味な役職についている事を恥ずかしかった時期も、彼にはあった。しかし、死んだ父親を悪く言うわけにはいかなかった。それに、所属が違っても、立派に国に尽くしていたのに変わりはない。だからこそ、今日はアカを何人捕まえたなどと毅達に嘘をついてきたのも事実である。

しかし、真面目な父の背中を思い出すうちに、年月と比例して罪悪感を抱くようになり、太一郎は彼を内心では誇りに思うようになっていた。

嫌、違う。そうではない。太一郎には、現在横たわる重要な問題に思い至った。父の隠された“遺産”が白日の下に曝され、その結

果、自分たち家族にどういう影響を与えるのかである。

それは決して、幸先の良い道ではないだろう事は火を見るより明らかだった。そして、厄介な“遺産”はもう外へ出てしまった。遅かれ早かれ、皆が知るところとなるだろう。

少年が呆然としていて、母が帰って来た。

「ただいま。太ちゃん、帰ってるん？」と告げても返事がないのを怪訝に思った妙子は、夫の部屋に立つ太一郎を見つけた。

しかし、「太ちゃん……」と近づいた時、その足元に散乱する盤と原稿用紙の束が目に入り、心臓を抜き取られたかのように体が硬直してあまりの驚愕で声を上げかけた。

「太ちゃん」ハッとした彼女は、息子の肩に手を乗せる。

太一郎はゆっくり振り返える。妙子には、その顔が腐った死人のように黒く染まっているように見えた。夕日から逆光しているせいである。しかし、その目には強い問い掛けを宿していた。彼女は、逃げるように畳に目を移した。

「お母さん、これは何なの？」

「太一郎、落ち着いて」

妙子は床に落ちたレコードを拾いながら、落ち着いた声で息子に問うた。「お父さんの部屋で見つけたん？」

太一郎は何も言わない。母になんて説明をするべきか考えあぐねていた。その微かな反応を彼は見逃さなかった。

お母さんは、まさかこの事を知っていたの？

玄関の方から「御免！」と訪問を告げる男の声が響いた。決して音程は高くもないのに、明瞭で且つ無機質な声に、太一郎は静電気が流れたようにビクツと体を震わせた。まるで、細い首根っこを剛力な握力で掴まれ引っ張られた感じがした。

二人が玄関に行くと、三人の男達が待っていた。学生服と見間違えような黒服を着て、腰には警棒とサーベルを下げている二人組の警官と、その間には中年の小男が挟まれるような形で立っていた。

小男は母子を見るなり、帽子を取って頭を掻きながら「夕方時に

すんませんな。神長さんですな？」

「はい」妙子を静かに答え、「何か？」

「実はですな、先ほど、こちらで変な通報を受けましてな。お宅さんの家が、“都合の悪いもん”を隠しとるというんですわ」

十中八九、通報者は貴一だろう。

「ホンマですか？」

「主人の書齋にあります」妙子は部屋の位置を教えると、玄関に下りて両手を差し出した。「事情は署でお話しします」

「話が早くて、助かりますわ」

若い方の警官が手錠を取り出そうとした。それを小男が片手で制した。「そんなんはな、往生際の悪いもんに填めんかい」

呆然と立っているしかない太一郎に、妙子は振り返って諭した。いつもの優しい顔に戻っていたので、彼は少し安堵した。

「太ちゃん、お母さんはちよつとだけ出かてますから、今日はお姉ちゃんと夕食を済ませるんよ」

「お母さん、逮捕されちゃうの？」

彼女は首を横に振り微笑んだ。「お話を聞いただけ。大丈夫。お姉ちゃんの言う事をちゃんと聞いちゃ」

「ボン、お母さんの言う通り話を聞いただけやから、安心しいや」

小男が顔を伸ばすが、反射的に太一郎は後ろに下がった。「太一郎」と咎めるも、さすがに彼の警戒心は強い。小男は小さく笑った。良い子だからね。そう告げて、妙子は小男の憲兵に連れられて行った。

その後少一時間ほど、残った警官の二人が父の部屋だけでなく座敷や奥間、果ては太一郎達の部屋まで家捜しをし、見つかった赤盤や原稿について、少年に向かってあれこれとしつこく詰問してきた。遠慮のない、押し潰してくるような不躰な尋問に、太一郎は自分でも恐ろしいぐらいに冷静に答えた。教室で演じたまま、ハキハキとゆっくりと。

父の裏切りを知り、母の黙認も知り、その母も連れ去れたと

いうのに。

浮かんでは消えていく濁流が、太一郎を呑み込んでいた。願うなら、そのまま埋もれて沈んでしまいたかった。藻屑となって消えてしまいたいと、彼は強く思った。だが、いくら考えた所で、どこかへ消えたりはしなかった。

お父さんはどうしてこんな隠し事をしていたの？ どうして今になって？ お母さんが連れて行かないといけないのになったの？

なぜ、僕は何もせずに突っ立っている？ これから、どうなるの？

ふと、裏山の砲台の筒先を覗きたいがために、窓に寄ったが、結局はできなかった。

日暮れ時で赤く染まっていた空は、いつの間にか夕闇が落ちて、黒い山だけしか視界に捉えるしかできない。灯し頃であるはずなのに民家からは照明が全く漏れず、家の中は完全な闇に包まれていた。以前は、夜間の刻を報せる入相の鐘が数回鳴っていたが、今は遠い昔、近年の貴金属類の供出は、寺院の鐘にまで対象にしていたため、外からは何も聞こえてこなかった。ただ、他の家から響くラジオ放送の曲がかすかに耳へ流れてくる。

そろそろ、ラジオをつける時間だ。太一郎は、いつもの癖で立ち上がりかけた。膝が笑うように痺れ、そのまま部屋の真ん中でうつぶせに倒れたきり、動かなかった。

今日の戦況はどうか、曲目はどれか、また“転進”だろうか、と、ぼんやりと考えていた。いくら繰り返し返しても、大きく脳裏にこだまするのは、やはり誰かの一言だった。

こいつの親父はアカや！ こいつも、きっとそうや！

三 巴の心配

六時を過ぎた頃、神長巴が家の通りが見える地点まで歩いていると、門前から黒服の男が二人出てくるのを目撃した。なぜか、咄嗟に電柱の陰に隠れた。

お客にしては、どこか陰険な雰囲氣に一瞬泥棒かと思ったからだろう。昼間ならともかく、今は墨を塗ったような闇夜である。おまけに、彼女のいる場所には電灯がないため、その二人組が警官だとは知る由がなかった。

彼らをやり過ごした後、玄関の戸が開け放された我が家へと急いだ。本当に泥棒だったら、一大事だ。我が家には金目の物はないが、大人の男もいないので心細いことこの上ない。空威張りの弟では頼りにはできない。

開けっばなしの玄関に立ち、妙子や太一郎を呼んでも誰も出てこない。まさかとは思うが、巴の頭の中では、部屋中を荒らされ、奥間の太い柱に括りつけられた（おまけに猿ぐつわをされた）母と弟という光景が出来上がっていた。

ますます彼らの顔ぐらいいは見ておくべきだったと後悔し始めた矢先、奥間から漏れる光を見るなり、彼女は血相を変えて部屋に入った。

灯火管制の決まりで、電気の明りが外部に漏らしてはいけない事になっている。奥間の窓には、確かカーテンはなかったはずだ。

友人から聞いたが、灯火管制を怠った者は懲役一年になるとかならないとか。巴はさっきの用心を忘れ、慌てて奥間の襖を引いた。

奥間には、太一郎が一人だけ立っていた。柱に緊縛されてはいなかった。ただ、彼女の予想通り、部屋の中は滅茶苦茶に荒らされていた。

——まさか、ホントに泥棒が……？

「どうしたん、太ちゃん？」床に散らばった品々を探り足で避けながら、呆然としている弟に恐る恐る近づくなり、「一体どうしたの？ お母さんどこ？」

——まさか、誘拐されたとか？

とりあえず、照明をナツメ球だけ点けると、弟と顔の高さを合わせて落ち着いた口調で話しかけようとしたが、一向に反応はなかった。スイッチの切れた機械と同じように一向に微動だにしない。

泥棒どころではない、何か一大事が起きたんだと、巴は顔色を変えた。

「太ちゃんは何があったん？ 話して」

再度、彼の肩を掴んで問い質した。死んだ魚のような目に生気が幾ばくか戻った。それと同時に瞳から涙があふれた。

「お母さん、連れて行かれちゃった」

「誰に？」

「特高の人達に……」

それだけで姉は承知したらしい。弟の目線の高さに屈み優しい声で――もしくは優しく装う感じで――問いかけた。

「太ちゃん。何があったか、話してちょうだい」

太一郎は最初、すべてを話そうとして躊躇った。級友らを見返すためとは言え、そもそも自分のせいで、父が隠していた押収品が露見してしまい、母親が特高に連行されたとは、どうしても言えない。少年には、事実を知られてしまうのが怖かった。

けれど、話の要領を得ない彼女は諦めず聞いてきた。

いつもと同じ姉の言葉であって、いつもにはない感情が見え隠れしているようだった。これが、何か悪さをして咎められる日常なら、彼は煙に巻いてふざけ合っているうちに有耶無耶になっていただろう。

弟を動揺させまいと神経を使う姉の言葉が、彼を追いつめていた。重い雰囲気を負う今の姉があまりにも不相応だったからだ。

その原因が意気地のない自分だと分かっていた。以前から迷惑をかけないように頑張って来た結果が仇になってしまった。

「僕が……お父さんの部屋を皆に見せたからや。僕が余計な事せんかったら……」

姉は首を振る。「太ちゃんは悪くない。いつかは分かってもらえるよ」

「でも……」

彼が涙と鼻水を流す顔を上げると、巴はクスリと笑い、ハンカチ

を取り出した。

「心配しなくても、お母さんは帰って来るよ。だって、お父さんは働いてた職場なんだよ。きっと無事だよ」

本当にそうだろうか。姉に鼻水を拭かれながら、情けない思いを押しつける不安が、膨らんで破裂する寸前だった。果たして自分達は何もなかった、何も知りませんでしたと証言しても通るのだろうか？ 以前のままで済むのだろうか？

彼が想像するのは、自分や姉も同じように怖い顔をした大人に尋問されている光景だった。今まで自分が味方だと思っていたものがこんなに怖いとは思えない。

「お姉ちゃん？」

「なに？」

「お姉ちゃんは、お父さんが――」と太一郎は思わず言い淀んでしまった。それに対して、「どうしたの？」と巴は言ったが、「ううん、なんもない。ごめんなさい」

もしかして、お姉ちゃんもお父さんがこんなものを隠していたのを知っていたの？ それだけは聞いてはいけない気がした。

二人だけで静かな夕食を済ませ、床に就いた姉の隣で、太一郎はずっと起きて、母親の帰りを待っていた。全然眠れないから、寝ずの番をしているしかない。巴も同じだった。普段は勝気に満ちている両目はしばらく閉じるのを許さなかった。

日付が変わっても母は帰ってこなかった。

四 沈黙の通学

翌朝、門前に立つ太一郎は、昨晚の夢を思い出していた。

壊れた家具やガラクタの山、その中を背中に羽でも生えているのかのように、身を軽く、瓦礫の大地と雲一つない青い宙を、疾走と滑空を交互に繰り返していた。

連行された母、父の遺品の問題――あの憎らしい貴一も――など

綺麗さっぱり忘れ、解放されたかのような天真爛漫の笑みを溢している。両手は、零戦の日の丸が描かれた両翼のように大きく広げていた。

その時、太一郎は誰かの真横を通り過ぎた。顔は見えなかったが、薄い白髪の後頭部と手に握る杖で、相手が老人だと分かった。見慣れない変な服を着ている。マタギのそれに似ているが、どうやら少し違うようだ。

老人は、自分が来た道――打って変わって、黒い幕が下りたような先へと歩いている。行っちゃ、駄目だ。何となくそう思い、老人を呼び止めようとしたが、思うように言葉は出てこない。そうするうちに、老人は暗い道へと消えて行った。

『結局、逃げられなかったな』誰かの声がした。あの老人かもしれない。

仕方なく振り返った太一郎は、いつの間にか、いつもの砲台の広場に来ていた。春乃や清照、豊道もいない。彼一人が、そこにいた。太一郎は、ポツンと設置された大きな砲台に近づいた。相変わらず、鉛色の半球から突き出て伸びる筒が、夕焼けに染まった空を仰いでいる。

足元に画用紙が一枚落ちていた。何かが描かれている。砲台と自分の絵だった。ハルの忘れ物だろうかと思い、それを拾った矢先――。

太一郎は夢から醒めた。頭を軽く小突かれたせいだった。

母の代わりに割烹着を着た巴が「寝ぼすけ」と見下す。青年と見紛う短髪と、勝気そうな二重に、母の妙子に似た小さな血色の良い唇。

いつもの姉だった。でも母はいないから、いつもの朝とは言えなかった。

「お母ちゃん、帰ってこなかったんか？」

太一郎は姉が寝ていた隣に敷いておいた空の布団を見つめた。同時に、昨日の事が夢ではなかった事実の方を再び思い知った。

「大丈夫やて。さつ、朝飯出来てるから、早よ食べ」

巴はそれだけ言うと、太一郎は急いで支度を始めた。

——そして今、太一郎は、下級生を統率していつものように自ら先導して登校しようとしていたが、集合場所に着くなり変容を目の当たりにした。

貴一が来て以来、毅や恭平が彼と共に登校するようになり、残された後輩達を引率するのが太一郎の役目だった。

その彼らの姿さえ、消防の水槽が置かれた集合場所には一人もいない。

小さな通り故、隣組の結束は固い。噂が広がるのは滅法早いだろう。こと醜聞ならば尚更だ。悪い噂なのか？　いつも彼らに話していた通りなら、そうだろう。

「大丈夫、太ちゃん？」

片づけを終えて遅れて家から出てきた姉が心配そうに呼びかける。

「平気。じゃあ、行ってきます」

これ以上、余計な気を掛けたくと振り返らずに学校へ向かった。

大方、皆も当に行ってしまったのだろう。

そう、気のせいだ。太一郎は自らに言い聞かせて、いつも以上に人通りの少ない通学路を歩いた。

本当に、すべては気のせいなのだろうか？

太一郎少年が通りかかると、『品切レ』の看板を掲げる八百屋の主人は、隣の古書店の店主との世間話を中断し、彼が通り過ぎるまで目を伏せていた。

豆腐屋——出征軍人の札が誇らしげに掛けて日も浅い——のお婆さんが自分を視界に入れると、緩慢な動きで逃げるように店の奥へ引っ込んだ。

水を撒く主婦の前を通るたびに突き刺さるような目線を浴びる。聞こえそうで聞こえない囁きが交わされているのも、太一郎は勘違いと信じたかった。

在郷軍人会の齋藤老人——この辺の子供たちからは雷親父で通い、

日露戦争の戦歴を持つ――が、彼に向かって何やらをブツブツばやいているのも、決して自分に対してではなく、日本の今の戦況を指しているのだと、家と学校の通学路の境目である竹筋のポストを通り過ぎながら、太一郎は強く思った。

一人で学校の校門に着き、奉安殿に礼拝しようと挙げていた両手を下ろして、彼は愕然とした。家を出てから、ずっと自分が両耳を塞いでいた事に初めて気づいたのだ。

五 黒い教室

神長太一郎は、自分の教室の前に立っていた。曇りガラスで中は見えない。

昨日にかけて朝に起きた一連の出来事が、すべて夢でも幻でもないと知っていた。この先に待つのは、今までの日常ではないと分かっているからこそ、その足は硬直してその一步を阻んでいた。

このまま突っ立っているのは、あまりにも馬鹿げている。遅かれ早かれ、集会の時間で皆が出てくれば、目と鼻の先で鉢合わせる事になる。

あまりにもばつが悪い。何も起きていないかもしれないじゃないか。

もうどこにも後進できるところなんてない。後ろに下がるには進み過ぎた。ここは外地ではないのだ。決して、“転進”なんて術などない。どこへも逃げられない。

意を決すると、彼は扉を引いた。顔を伏せ、無言で教室に足を踏み入れる。

級友達の話し声がピタリと止んだ。先生が入って来た時と明らかに違う。突然訪れた沈黙に混じって、誰かの囁き声、クスクス笑いが耳朶を打った。

何も起きないはずなどない。もしも彼らの立場で、他の誰かの親がアカと分かれれば、自分も同じようにしたはずだ。

もしかすると、自らが先導を切っていたかもしれない。

太一郎は重い足を無理やり動かす。前方、側面、背後に、容赦ない視線を浴びながら、近いようで遠い自分の席に向かう。まるで、全身を裁縫の針で刺されたように鋭く痛む。丸裸で歩いているみたいだった。

そうだ、これは思いすごしに過ぎない、かもしれないのだ。すべては単なる勘違いで——と、太一郎の足が止まった。

いつも座る位置には、すでに誰かが腰を下ろしていたのだ。一座座ってほしくない相手だった。狭苦しく、少しせり出た腹が窮屈そうだが、その顔は満面の笑顔が太一郎を睥睨する。一番事情を知る人物。噂が広がるなら、穀よりもずっと早いはず。当然、咳を間違えているわけではないだろう。

ガマ蛙めが。貴一がそう見えるのは、普段から感じる空腹とは違っていた。

「そこはボクの席や。退いてくれへんか？」

相手は何も言わない。反吐が出そうな笑顔を向けてくるだけである。その時漏らしてしまった——以前なら絶対に堪えていたはずだ——舌打ちがはつきりと自分でも聞こえるぐらいだった。

勝ち誇っていた貴一の顔が歪む。太一郎は先刻感じた後悔を修正した。それさえ拝めたのなら、御の字だ。

「非国民や」

背後で誰かが言った。嫌、自分はそいつを知っている。

親が米屋をしている慶永貫太だ。でっぷり太った体格——貴一が相撲の小結なら、彼のそれは横綱に匹敵する——をした貫太の野高い声は、特徴的だから間違えようがない。

「太ちゃんは、スパイの倅や」

これは、三組の西田先生の子供である西田耕介の声だ。親に似て牛乳瓶の底みたいな眼鏡をして、いかにも優等生のように装っているが、成績はあまり良くない。

「神長の裏切り者」

荒岩毅が言った。こいつはいつもそうだ。媚を売るのが早ければ、やはり掌を返すのも人一倍早い。獣とも鳥とも呼べない、コウモリだ。

「アカは縛り首だな」

背後で、貴一がはっきりとそう言った。だが、太一郎は振り返ろうとはしなかった。

どんな事を言われようが、これ以上、半田貴一とだけは顔を合わせると、太一郎には到底耐えられなかった。

「アカは死刑だ！」全員が合唱した。

第一声の直後に鐘が鳴り響いたのは、太一郎には束の間の救いであつた。集会の予鈴に従い、皆がぞろぞろと席を立つ。誰もが、彼の脇を通る際、「お前とは絶交や」、「逆賊め」、「アカの子はアカ」など、思い思いの罵詈雑言を放った。

太一郎は耳を塞いだ。それでも、人の声は微かに聞こえてくる。だから、彼自身もただ一語のみを繰り返した。

「違う、違う、違う、違う、違う、違う、違う——」

その間、なぜか太一郎は平家物語の一節を思い出した。祇園精舎の鐘の声。盛者必衰の響きあり……。

ふと目を開けると、教室の中は太一郎しかいなかった。予鈴はまだ止んでいないので、たった数十秒の間である。

「太ちゃん……」誰かの声がした。

黒板側の戸に、教室が隣である一宮隆が立っていた。彼とは少し家が離れていたが、時々一緒に遊んでいる。太一郎よりも小柄で、丸っこい顔に、気の弱い性格が似ているのでやけに気が合った。

当然、太一郎の件を隆がまったく知らないはずがない。

「早く行かんと、怒られるよ」

隆は消え入るように言った。それを聞いて、力なく歩き始めた太一郎の耳には、いつまでも鐘に混じる罵声が反響しているような気がしてならなかった。

『非国民のアカ！』

こんな事が、今日から毎日続く。嫌、昨日から……か。
少年の足取りは、教室に入る時よりも一層重かった。

世の中は流れてゆく。

誰にも止める術はない。遅れや滞りを知らず、加速も一切なく、
ただ淡々と過ぎてゆく、不可逆の大河。

誰にも止める術はない。止める必要など微塵もない。ただ、次の
始まりの前に控える終わりに向かうだけである。

終わりは、もう始まっている。

《次回へつづく》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6260t/>

砲台守の太一郎

2011年12月2日21時55分発行